

比較文化論

No. 43

日本比較文化学会第47回全国大会
2025年度国際学術大会
発表抄録

於 香川大学教育学部（幸町北キャンパス）

2025年5月17日（土）

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉

韓国日本文化学会

台湾日本語文学会

淡江大学村上春樹研究センター

台湾日本語教育学会

台湾応用日本語学会

共催：香川大学教育学部

日本比較文化学会第 47 回全国大会・2025 年度国際学術大会

共催・香川大学教育学部

日本比較文化学会第 47 回全国大会・2025 年度国際学術大会プログラム

会場：香川大学教育学部（760-8522 高松市幸町 1 - 1 香川大学幸町北キャンパス）

スケジュール：

5月17日（土）

- 8:15 受付開始
- 8:30～9:00 編集委員会（第二会議室）
- 9:10～10:00 理事会（第一会議室）
- 10:10～10:15 開会式（415 講義室）
- 10:15～11:00 総会（415 講義室）
- 11:10～12:10 シンポジウム（415 講義室）
テーマ：「比較文化の地域性と新たな視点の創造」
- 12:10～13:00 昼休み
- 13:00～14:00 講演（ワークショップ）
- 14:15～15:55 研究発表第 1 部（各会場）
- 15:55～16:10 休憩
- 16:10～17:50 研究発表第 2 部（各会場）
- 18:00～18:10 閉会式（415 講義室）

18:30～20:30 情報交換会

会場 香川大学生協 1階 食堂

研究発表者、司会の皆様へ

- ・研究発表の時間は、発表、質疑応答、交代時間を含め、1人30分以内です。
- ・各教室には Windows の PC が設置されています。ご自身の PC をご使用の場合、機器接続などはご自身で対処していただきますようお願いいたします。Mac を使用される場合は、接続用アダプターを各自でご用意ください。
- ・受付時にお申し出いただければ、学内 LAN もご利用になれます。
- ・資料を配布される場合、20部程度をご自身でご用意ください。

地図・アクセス (<https://www.ed.kagawa-u.ac.jp/access/access.html>) (時刻表リンクあり)

5月17日(土) 日本比較文化学会第47回全国大会・2025年度国際学術大会
香川大学教育学部 (760-8522 高松市幸町1-1)

JR予讃線・瀬戸大橋線・高德線 高松駅下車 ことでんバス

まちなかループバス西回り(約15分) 香川大学教育学部前下車 徒歩約1分

弓弦羽行き・昭和町市立図書館経由(約10分) 幸町下車 徒歩約5分

弓弦羽/香西車庫行き・県庁日赤前経由(約10分) 宮脇町下車 徒歩約7分

JR高德線 昭和町下車 徒歩約7分

JR予讃線・瀬戸大橋線・高德線 高松駅下車 徒歩約20分/タクシー約10分



プログラム

シンポジウム

11:10~12:10 415 講義室

テーマ：比較文化の地域性と新たな視点の創造

司会：公文素子（高知大学非常勤講師）

パネリスト

1. 曾秋桂（台湾日本語教育学会理事長・淡江大学日本語学科教授）
AI時代のFOMO（フォーモ）とJOMO（ジョーモ）の底力試し
2. 奥村訓代（北洋大学学長）
比較文化の新たな視点：グローバル時代の日本語教育を考える
3. 栢山剛（国立都城工業高等専門学校教授）
太平洋戦争期までの日本における政治外交史の一視点
—政治家尾崎行雄と外務大臣重光葵の生い立ちと地域性を比較しながら—

基調講演

13:00~14:00 415 講義室

講演者：前田秀雄氏（書家・篆刻家・岡山大学等非常勤講師）

演題：日本人はなぜ筆文字文化を忘れてはいけないのか？

「〈書く〉と〈打つ〉の違いを体感・体得するワークショップ」

研究発表

第1会場 413 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

代書芸（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

中日両言語における「言いさし」表現の対照研究—声調の視点から見る使用実態について—

佐古恵里香（流通科学大学特任講師）・山内信幸（同志社大学教授）

プレゼント授受の場面における視線位置と言語表現の選択に関する一考察—日本語母語話

者と中国人・ベトナム人日本語学習者のデータ比較を通じて—

陳志文（国立高雄大学東アジア言語学科教授）

現代日本語における四字漢語の構造について—名詞用法を中心として—

第2部 16:10-17:15 司会：佐古恵里香（流通科学大学特任講師）

付潤爽（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

中国人日本語学習者の複合動詞の産出に関する習得研究—品詞構造の視点から母語転移を

考察する—

大谷鉄平（北陸大学専任講師）

オンラインコミュニティでの投稿における文末表現—Discordにおける投稿と「キャラ」—

第2会場 311 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

菅野瑞治也（京都外国語大学教授）

名誉の概念と決闘を強要する社会— フォンターネの『エフィ・ブリスト』を手がかりにして —

林裕二（西南女学院大学教授）

Kazuo Ishiguro: Come Rain or Come Shine の翻訳における二人称についての考察

東本裕子（横浜商科大学教授）

『赤毛のアン』における女性の自己表現の変容

第2部 16:10-17:50 司会：林裕二（西南女学院大学教授）

張潔旒（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

日中動物に関する慣用表現の翻訳— 『紅樓夢』を中心に—

王子涵（同志社大学大学院博士後期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

日本で魯迅作品を読む（Part 2）— 魯迅小説の受容と翻訳について—

中野優子（東北学院大学教養教育センター助教）

森鷗外のデスマスク考察とその行方— 鷗外のデスマスクはなぜとられたのか—

第3会場 312 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：藤山和久（広島経済大学准教授）

蒙英璨（広島大学大学院博士前期課程）

谷崎潤一郎作品における「塔」

柳燁佳（同志社大学外国人留学生助手）・山内信幸（同志社大学教授）

同一著者の文章表現に連続性が存在するのか？— 文体類似性の時間差比較を通じて—

矢島真澄美（東北大学大学院国際文化研究科 GSICS フェロー）

英国人写真家フェリーチェ・ベアトの写真表現とその位置づけ — 英国人画家チャールズ・ワーグマンとの比較—

第2部 16:10-17:15 司会：広池真一（北洋大学兼任講師）

相馬法仁（茨城県笠間市役所・職員）

旧茨城県庁舎内部の装飾分析— 当時欧米で流行したデザインと比較して—

横道誠（京都府立大学・准教授）

当事者研究と当事者批評

第4会場 422 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：伊月知子（愛媛大学准教授）

蘇文博（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程）

文人筆談における「雅」と「俗」— 黄遵憲筆談資料を中心に—

葉菱（淡江大学日本語学科准教授）

村上春樹『一人称単数』における未来へのメッセージ

曾秋桂(淡江大学日本語学科教授)

「死の文学」と言われた村上春樹文学と「グズグズした生」を肯定した村上春樹文学との距離—処女作『風の歌を聴け』から1980年代までの創作群から見て—

第2部 16:10-17:50 司会：佐藤慶治（鹿児島国際大学准教授）

橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）

計量テキスト分析による大隈重信の女子教育に関する演説談話の一考察—「夫婦共稼ぎと女子の学問」を中心に—

浜本隆三（甲南大学准教授）

ハンナ・リデルの訃報記事に見る回春病院の欧米ネットワーク

武富 利亜（近畿大学教授）

昭和の日本における女性表象の変遷—映像コンテンツからの考察—

第5会場 423 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：二村洋輔（名城大学助教）

井原彩樺（同志社大学学部生）・山内信幸（同志社大学教授）

国語教育における助詞「は」の教授法に関する一考察

程天武（同志社大学大学院博士前期課程特別学生）・山内信幸（同志社大学教授）

仮定条件文におけるモダリティ制約について—「と・ば・たら・なら」を中心に—

山本茉莉（びわこ学院大学非常勤講師）・山内信幸（同志社大学教授）

アメリカの歴代大統領3名のインタビューにおける人称代名詞 it の使用傾向—“when it comes to X” 構文に着目して—

第2部 16:10-17:50 司会：大岩秀紀（関西外国語大学教授）

白鳥絢也（常葉大学准教授）

わが国の教育課程の変遷を見つめる(2)—特に「平成」(前半)の学習指導要領に注目して—

那須野絢子（常葉大学外国語学部専任講師）

「鏡」モチーフが語る表象とドッペルゲンガー—ワイルド・芥川・太宰・ハーンの分裂する自己—

林盛奎（白石大学校教授）

憂鬱な心、心配事の私—井伏鱒二の『山椒魚』—

第6会場 428 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：伊藤豊（山形大学教授）

高橋暖（筑波大学博士後期課程単位取得退学）・李静怡（筑波大学博士後期課程）

坂本龍一における晩年性について

柴田香奈子（東京大学助教）

社会の周縁から信仰の役割を問う

森下一成（東京未来大学教授）

仏教葬儀の市場化と消費者の行動—真言宗における引導作法をもとに—

第2部 16:10-17:50 司会：樋口謙一郎（相山女学園大学教授）

松井夏津紀（京都先端科学大学准教授）・森岡千廣（京都先端科学大学嘱託講師）

ポップカルチャーと伝統文化の交差点—アニメを活用した文化理解と言語習得—
塩田英子（龍谷大学特任准教授）

ハジチ文様にみるメトニミー—呼称の解釈と俗信に注目して—
ルッケル瀬本阿矢（立命館大学准教授）

多文化的教育環境における生成AIの導入と課題—フランスの大学を事例として—

第7会場 526 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：中村友紀（関東学院大学教授）

庄妍（神戸大学大学院博士後期課程）

中国武侠作品の日本語字幕に関する研究—マルチモーダル談話分析の枠組みをもとに—
長田元（岐阜聖徳学園大学准教授）

総合計画における港町文化の位置づけの変遷について—石川県七尾市を事例として—
大野雅子（帝京大学教授）

18世紀英国における紅茶—消費文化と女性蔑視が交錯するとき—

第2部 16:10-17:15 司会：佐藤和博（弘前学院大学客員教授）

董航（環太平洋大学専任講師）

異文化高齢者の生活実態と支援ニーズに関する予備調査—神戸市における事例研究—
郭潔蓉（東京未来大学教授）

新たな経済の担い手としての高度人材の獲得と課題—高度人材獲得に向けた取り組みに関する—
考察—

第8会場 525 講義室

第1部 14:15-15:55 司会：西川祥一（北洋大学教授）

譚梓怡（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

中国人日本語学習者におけるマルチメディアによるオノマトペの習得—アニメ視聴の実証
実験を通じて—

呉翰辰（同志社大学大学院博士前期課程特別学生）・山内信幸（同志社大学教授）

日本語の「授受表現」に関する考察—映像作品を通じて学習の可能性について—
祁雅麗（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

中国人日本語学習者における「ナガラ」の習得に関する—考察—

第2部 16:10-17:15 司会：北林利治（京都橘大学教授）

橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

リーディングにおけるボトムアップ処理の向上を目指した初年次英語教育の精読の授業に
関する—考察—

洪心怡（高雄科技大学応用日語系教授）

台湾人学習者による日本語二重母音の発音特徴について—長音との比較を通じた持続時間の
分析—

シンポジウム「比較文化の地域性と新たな視点の創造」

11:10~12:10 415 講義室

AI時代のFOMO（フォーモ）とJOMO（ジョーモ）の底力試し
曾秋桂（台湾日本語教育学会理事長・淡江大学日本語学科教授）

古今東西を問わず、現在の大学に在籍している大学生の殆どは、生まれた時から携帯、インターネットがある環境で育った世代、言わばデジタルネイティブ世代ないしネオ・デジタルネイティブ世代に属している。この世代がデジタル機器に強いこと、情報発信がスピーディにできること、思想が柔軟であることを強み¹として挙げられる。その一方、情報を逃すことを恐怖に感じ、ネット依存症、ソーシャルメディア中毒になる、いわゆるFOMO（fear of missing out、フォーモ）の特徴が指摘されている。とはいえ、FOMOに対して、「JOMO」（Joy of Missing Out）のように寧ろ情報を見逃したことから喜びを感じるタイプもある。こういった特質を同時に兼ねた同世代間の意識の違いは知ったものの、彼らを対象に高等教育を行う際に、彼らの持つ強みを如何に引っ張り出して、AIの底力を発揮してもらうことは、AI時代においては、何より喫緊な課題だと言えよう。

AI時代下、全身全霊にAI産物に没入し、確かに側にいながらも遠く離れているようで、またAI産物を媒介に遠く離れながら側にいるように感じられることは少なくない。AIや通信技術等の活用により、世代間、同世代間の意識、物事に対する感覚、AI産物のなかった時代の学校教育、学習様式、社会価値などは、超スピードで激変しつつある。

特に109学年度上半期(2020.9-2021.1)から毎年を開講した勤務先の外国語学部の教養課程「AIと外国語学習」を履修した学生を見てきた発表者が僅か5年間で世代的差異性をしみじみと感じてしまう。2022年にChatGPT-3.5、2023年にChatGPT-4、2024年にClaude3、ChatGPT-4o、DeepSeek V3、2025年1月にDeepSeek-R1、ChatGPT-1oがリリースされたAI産物から蒙った莫大な影響が誰の目に明らかなように、外国語教育の「読む・話す・聴く・書く・訳す」の5技能が日進月歩に革新した生成AI技術に殆ど代替される故、外国語学部の存続が最新のAI技術がリリースされる度に激論は後を絶たない。

そこで、本発表ではこの厳しい現状を真摯に受け止めた上、台湾でAIリテラシーとAI応用力を導入し授業の実践例を示しながら、AI時代こそ、比較文化の地域性とクリエイティブな視点を獲得しうるFOMO（フォーモ）とJOMO（ジョーモ）のAIの底力を逆に証明して見せたいのである。

¹ 「デジタルネイティブとは?それぞれの世代と特徴を大解説!」
<https://www.onoff.ne.jp/blog/?p=4626> (2025年3月10日閲覧)

シンポジウム「比較文化の地域性と新たな視点の創造」

11:10~12:10 415 講義室

比較文化の新たな視点：グローバル時代の日本語教育を考える
奥村訓代（北洋大学学長）

我々の生活のすべてが、とめどもなくすそ野を広げ、言語・文化・人種・地域などあらゆる環境を乗り越えて繋がっているように感じる今日この頃です。特にPCの発展に伴い、居ながらにして世界の情報が手に入り、色々なアプリやソフトのお陰で、無料で瞬時に世界とつながることも可能となりました。特に言語や・教育の面でも2022年11月のチャットGPTの登場により、我々の日常生活は大きな影響を受け、今や何をするにも生成AIは欠かせない時代です。そのような中で、インバンドや技能実習生の増加などを背景に、いわゆる訪日外国人数は右肩上がりに増えている。本日は、以下を意識しながらグローバル時代の日本語教育を考えてみたい。

- 1 普遍性と特殊性（地域：言語・文化・気候・産業・・・人間性）
- 2 教科書と教授法（海外と国内、ベストセラー？）
- 3 生成AI時代の近未来(新しい法と秩序・新たな諸問題・機械性と人間性)
- 4 情報と習性（オーバーツーリズム・新たな諸問題）
- 5 まとめ（情報・知識の統一化、区別と特色⇨ 何を加味し・何を残すか）

【参考文献】

丸山貴宏（2024）「教員のファシリテーターとしての機能」『埼玉大学教職大学院令和5年度課題研究報告書』

文部科学省初等中等教育局（2024年12月26日）Ver.2.0

「初等中等教育段階における生成AIの利用に関するガイドライン」など

シンポジウム「比較文化の地域性と新たな視点の創造」

11:10~12:10 415 講義室

太平洋戦争期までの日本における政治外交史の一視点
—政治家尾崎行雄と外務大臣重光葵の生い立ちと地域性を比較しながら—
栢山剛（国立都城工業高等専門学校一般科目教授）

私は2024年度までの5年間、三重県に位置し、今年で創立150周年を迎える国立鳥羽商船高等専門学校に勤務していたが、それ以前の19年間、鹿児島と宮崎の高校で英語教員をしていた。ところが、縁あって、今年度4月から故郷、南九州の都城高専に赴任したばかりであるが、同じ高専間を比較しても、その地域に根差している様々な取り組みには違いが存在し、同じ日本国内で、たとえそれが田舎であったとしても、異なる言語や文化、そして価値観の違いをよく感じることがある。

ところで、これまでの私の研究では、太平洋戦争以降に勃発したベトナム戦争の大きな転換点となった1968年以降のアメリカの外交政策決定に特に焦点を当ててきた。しかし、最近の国際政治上ではウクライナ戦争など不安定な状況もあり、改めて日本の国際的な立ち位置の重要性を感じ、日本の側面からの戦争史を平和的視点で顧みる必要性に駆られるようになった。

もともと私のベトナム戦争研究においては、米国の対外政策の決定に重要な役割を果たしたリンドン・ジョンソン大統領やリチャード・ニクソン大統領に着目していた。一方、太平洋戦争研究に関しては、重光葵は外交の分野で、また、政治の分野では尾崎行雄がそれぞれ戦前の日本国内で『平和主義』を唱えていたキーパーソンという認識を、研究を続けていく中で抱くようになったので、最近では太平洋戦争期までの日本の政治外交に影響力のあったこのような人物たちに少しずつ興味を持つようになっていく。

今回の研究では、まず、特に太平洋戦争開戦前までの尾崎行雄の政治活動について、限られた資料を基に明らかにしていく。ちなみに、尾崎行雄は三重県伊勢市にゆかりのある人物でもある。また、重光葵については地元九州の大分県出身であるが、これら二人の人物が、幼少期から青年期にかけて過ごした周囲の環境というのは、その後の2人の人生を大きく左右したものであることを学んでいく中で痛切に思うようになった。

加えて、普段、職場では、私は英語を教えているが、ビートルズやテイラー・スウィフトなどの英語の歌などを活用したアクティブ・ラーニングを導入し、歴史や文化、それに国際政治を融合した教科横断型の英語教育の実践に努め、学生たちに英語学習への興味関心を高めるきっかけを与え、同時に、学力向上に結びつける工夫を凝らすことに努めている。

最後に、今回の報告では、重光葵と尾崎行雄の両者の共通項についても、考察してみたい。具体的には、両者とも、信仰心が高く、重光葵は、父親の影響で伊勢神宮に次ぐ第2のパワースポットと言われ、全国の八幡神社の中心である大分県の宇佐神宮を幼少期から参拝していたのに対し、尾崎行雄は、高校時代を伊勢で過ごした関係で、その後もよく伊勢神宮に足を運んでいたようである。このような信仰心に基づいた政治外交的取り組みが、混沌としたグローバル社会で地域を超えた平和的解決を生み出す原動力になるかもしれない。

【参考文献】

波多野澄雄（1996年）『太平洋戦争とアジア外交』東京大学出版会

相馬雪香・富田信男・青木一能編著（2000年）『峯堂尾崎行雄』慶応義塾大学出版会

小泉憲和（2010年）『重光葵と昭和の時代—旧制五高で学んだ外交官の足跡』原書房

基調講演

13:00~14:00 415 講義室

日本人はなぜ筆文字文化を忘れてはいけないのか？
「〈書く〉と〈打つ〉の違いを体感・体得するワークショップ」
前田秀雄（書家・篆刻家・岡山大学等非常勤講師）

■東洋文明と西洋文明

人類が誕生して以来今日まで、東西の文明は世界の主権を譲り合いながら進化発展してきた。しかし両者の方法は全く異なる。大枠で言えば、西洋はデカルト以後、心身二元論であり、目に見えるものを科学で扱い、目に見えないものを宗教で扱う。対して東洋は陰陽を取り纏めて扱う一元論である。

「iPhone」の産みの親スティーブ・ジョブズは、親日派で東洋思想に傾倒し、仏教や禅に影響を受けていたと聞いた。その彼が自分の子供たちには「iPhone」も「iPad」も与えず、また使用に厳しい制限をつけるべきだとの考えを持っていたことは、今や語り尽くされている。このエピソードは、私の興味を掻き立てるが、ここでは「文字の記録」という機能について述べるに留めておきたい。

これから話題にする「筆」は、その最古の東洋文明が生み出した情報伝達 Tool であり、筆の特性を考える上で、対極として取り上げたい「iPhone」は、最新の西洋文明が生み出した情報伝達 Tool として、ワープロやメールの機能を備える。

■筆文字に潜む陰陽の世界

文字を打つことが多くなった今、本当に書くことを続ける必要はあるのだろうか。いったい人間が手書きした文字と、機械が打ち出した文字にはどんな違いがあるのだろうか。両者を同じ土俵に乗せて比較する試みは、「iPhone」が多機能 Tool という点で異論が出るだろう。そこで、あえて「最愛の人に思いを告げる一仕事」として、「筆」でしたための「恋文」と、「iPhone」で打ち出した「ラブレター」の違いを考えてみよう。筆で恋文を書くとき、古典的な習慣では、まず墨を磨ることから始める。最愛の人の面影を思い浮かべながら墨を磨ると、磨られた墨水の中には筆者の思いが溶け込む。水は人の心を転写する。その墨水を筆に含ませて墨書すれば、筆は筆者の思いもそのまま紙上に転写してくれる。筆文字には、意味情報以上の個人情報（氣）が焼き付いている。

対して「iPhone」は、電気力で文字を打ち出す。オンとオフの二択、0と1の組み合わせによる電気信号で、意味情報のみを恋人のタブレットに転送する。映し出されるのは無機質なドットの集積による文字である。メールに顔文字や二人だけにしか通じない符牒を籠める工夫がしたくなる由縁である。

古来、漢民族は陰陽取り混ぜたアナログ世界の構成単位を「氣」と考えたが、「筆」は、漢民族が神と対話をしていた甲骨文字の時代に、そのメッセージを受け取るために神託されたアナログ世界の Tool であり、この「氣」に感応する。対して「iPhone」は、PC原理によって作られたデジタル世界の Tool であり、「電気」で運用する。

つまり、アナログ世界の Tool である「筆」には、デジタル世界の Tool である

「iPhone」とは異なり、西欧の徹底した合理的・論理的な精神には到底理解出来ない、東洋の非合理的・直観的な思考に根ざした何物か（氣）が籠もるのである。「筆」で書き出された可視的な文字の「陽」の裏面には、不可思議で膨大な「陰」の世界が広がっている。

謝赫(しゃかく)の『古画品録』にいう「氣韻生動」もまた、書画に籠もる「生氣」に着目する術語だが、中国の王羲之は道教の道士として、日本の空海は密教の行者として、共に両国の書の名家たちは、文字を書く上で「氣」への配慮が出来る達人であった。

*拙稿 新しい「書写書道」授業のあり方 ―唐代の「法」から宋代の「意」へのシフトを早急に― より抜粋
『岡山大学 国語研究 第39号』(2025年3月20日 発行)

およそ創造行為の出力方式が、「書く」から「打つ」にシフトし始めた現在、この両者に対して安易にシフトしても好いのだろうか？

得るものと失うものの両者について、体感・体得する場を提供したい。

研究発表

第1会場 413 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

中日両言語における「言いさし」表現の対照研究

一声調の視点から見る使用実態について

代書芸（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

白川（2009）によると、「言いさし表現」は、「使えなかったんですけど」のように、日本人母語話者の日常会話において頻出する表現であり、この発話は、一見不完全文であるにもかかわらず、最後まで言い切らなくても意味はきちんと伝わる表現である。また、聞き手は、言語化されていない意図を察し、「じゃ、よかったじゃん。」という発話を返して、円滑なコミュニケーションが行われていることが確認できる。しかし、彭（2004）は、日本語学習者の中で最も多い中国人日本語学習者（以下、学習者という。）にとって、言いさし表現を理解し、正しく使うことは特に難しいと指摘している。

従って、言いさし表現は、言いさされているがゆえに、意味の確定度が不十分であるため、聞き手は推論プロセスを経て、該当発話文に含意された話し手の発話意図を特定する必要がある。学習者と母語話者の推論の結果が異なると、コミュニケーション障害が生じやすいということが考えられる。そのため、言いさし表現に対して、学習者は、どのように相手の発話の意味理解をしているのかという問題が出てくる。

李（2008:1）は、「中国語には言いさし表現がないのではなく、まだ研究に着手されていないだけのように思われる」ということを指摘しており、中国語では言いさし表現は存在するが、日本語よりは少ないという事実がある。また、田（2019）では、「不好意思、好久没画画。（すみません、しばらく絵を描かなかった。）」の中国語の文を言いさし表現と主張しているが、このような文は接続詞がないため、完全文と見なされるので、言いさし表現と分類する妥当性については、さらなる検討が必要である。

本発表では、まず、言いさし表現の構造上の異同に関する同定を確定し、さらに、日本語と中国語の言語構造の違いが日本語と中国語の言いさし表現の理解に影響を与えているとすれば、音調による影響の有無についても検討し、学習者の言いさし表現全般の理解プロセスを検証する。

【参考文献】

- 李曉博. (2008) 「日中両言語における言いさし表現の使用状況についての考察」『多摩：日本文体論学会文体論研究』第54号, pp. 1-16.
- 彭飛. (2004) 『日本語の配慮表現に関する研究—中国語との比較研究における諸問題—』大阪：和泉書院.
- 白川博之. (2009) 『「言いさし文」の研究』東京：くろしお出版.
- 田昊. (2017) 「日本語教育文法における「言いさし」の研究」一橋大学博士論文.

研究発表

第1会場 413 講義室

第1部 14:50-15:20 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

プレゼント授受の場面における視線位置と言語表現の選択に関する一考察
—日本語母語話者と中国人・ベトナム人日本語学習者のデータ比較を通じて—
佐古恵里香（流通科学大学特任講師）・山内信幸（同志社大学教授）

本発表では、「プレゼント」授受の場面のイラストを見た際に、視線位置計測機器を用いた入力（視線位置）情報の計測とアプトプット（産出文）のデータを基に、日本語母語話者 23 名（A）、中国人日本語学習者 23 名（B）、ベトナム人日本語学習者 17 名（C）の視線位置と言語表現のパターンを抽出し、それらを分析・考察する。本発表は、第2言語習得における共通して発達するとされるメカニズムの解明を目指すものであり、認知言語学における「注意の範囲の選定」や「言語化」の考え方を援用する。

具体的には、参加者が授受のイラストのどこを注視し、どのように視覚情報を切り取るかによって、日本語の授受表現（あげる、もらう、くれる）の使用がどう変わるかを検証する。調査は、視線計測装置を着用させた参加者にパソコン上で「プレゼント」を授受する場面のイラストを提示し、各イラストについて作文させるという形式で行う。各イラストの表示時間は 10 秒で、その後、30 秒間で作文を行う条件で、実験を統制する。分析方法としては、イラスト上で一定時間以上見た部分を「注視点」と定義し、注視点情報を収集する。視線位置と産出文（動詞の種類、テンス・アスペクト、誤用の有無）を変数として、注視点の総出現回数における各変数の比率を統計ソフト R で検定する。

分析の結果、各群において、一部、異なる視線位置と表現パターンが観察された。B・C 群は、イラスト上の「受け手」または「与え手」のどちらの立場になって作文するかを指定しない場合、「受け手」、「プレゼント」、「与え手」の3つの視線位置に平均の差は見られなかったが、特定の立場を指定した場合、参加者は指定された立場の人物をより注視しており、指示に応じて、学習者の注意が集められることが観察された。一方、A 群は指定なしの状態において、「受け手」をより注視し、「渡す」という表現が頻出した。また、立場を指定した場合、B 群および C 群と同様の傾向が観察されたが、自分がプレゼントを与えるという場面においても、「渡す」という表現が選択されることが確認され、シンプルな動作表現が選ばれる傾向があることを示唆された。総括すると、視線位置が産出文に与える影響や若年層の日本語母語話者の授受表現に関する意識の変化が確認できた。これらの知見は、日本語教育における文法導入や作文指導の際の重要な指針となり得るもので、視覚的に注目すべき点を正確に示すことは、学習者の注意力が散漫するのを防ぐ効果があると結論づける。

【参考資料】本調査で使用したイラスト（3枚）

 図1 立場を指定しない	 図2 「受け手」を指定する	 図3 「与え手」を指定する
--	--	--

研究発表

第1会場 413 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：高橋栄作（高崎経済大学教授）

現代日本語における四字漢語の構造について

一名詞用法を中心として一

陳志文（国立高雄大学東アジア言語学科教授）

発表者は近年「二字漢語」を中心に研究を進めている。それらの「二字漢語」の研究に関連して、本発表では「<二字漢語>+<二字漢語>」という臨時的四字漢語の名詞用法における使用実態に着目する。例えば、以下の例を見てみよう。

(1) 現在フランスに留学しているのですが、日本にいるときは肌の調子が良いのに、フランスに帰るとニキビが大量発生します。自炊で、栄養にも気を配っているので食生活が原因とは考えられません。やっぱり乾燥が原因なんでしょうか？(OC09_07783、590)

(2) 来る日も来る日も天井とのにらみ合いで、医師の仰せに従って絶対安静の繰り返しの日々であった。天井に映るものは夏の日々の海での生活であり、魚との対話のことばかりである。(LBt4_00002、12100)

(3) つまり、早期選抜で選ばれる社員は、間接的とはいえ学歴の初期効果の影響で、高学歴者に偏ってしまうということだ。もちろん、早期選抜制度の建前は、過去の学歴重視の選抜方式とは質的に異なる。(LBt3_00177、10410)

(4) 広島県比婆郡口和町下芦原の「まんさく茶屋」でワニ肉を食べたことがあった。衰退するワニ料理の伝承保存、さらに、ワニ肉の多彩な利用をめざして、前空笑子さんほか五人で昭和六十一年四月二十六日に開かれた店である。(LBt3_00178、18670)

(5) 切り身は煮たり焼いたりして食べた。当地には、稲を刈りあげ、収穫作業を終える十一月十日ごろ、「秋休み」と称して嫁を実家に帰す風があった。(LBt3_00178、45310)

(6) 当時、東日本に比べ西日本の経済的優位は明らかであり、かつ政治 機構は京都、大阪を中心にして成立していた。物資輸送の当時の主たる 手段である舟運から考えていくなれば、近畿が物流の中心地となりうる。(LBt3_00180、18040)

現代日本語のさまざまな文章の中で、「二字漢語+二字漢語」から成る「臨時的な四字漢語」を(1)～(6)のように頻繁に見ることができる。これらの「臨時的四字漢語」はわずか四つの漢字から構成されているものの、多様な品詞や構造を持つ複雑な組み合わせになっている。例えば、(1)の「大量発生する」という表現は、漢語動名詞の自動詞用法となり、「大量に発生する」という意味を形成している。(2)～(6)はいずれも名詞の用法としてよいと考えられる。こうした「臨時的な四字漢語」に関する体系的な研究は少なく、未だに解明されていない部分が多い。そこで、本発表では、「名詞用法の四字漢語」に焦点を絞り、体系的に比較分析を行う予定である。本発表を通じて日本語学の研究をさらに進展させるとともに、日本語教育にも貢献することを目指している。

研究発表

第1会場 413 講義室

第2部 16:10-16:40 司会：佐古恵里香（流通科学大学特任講師）

中国人日本語学習者の複合動詞の産出に関する習得研究
—品詞構造の視点から母語転移を考察する—
付潤爽（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

本発表は、中国人日本語学習者（CJL）が単純動詞を好む理由について、日中両言語における複合動詞の対応関係を分析することによって、CJL に対する複合動詞の効果的な指導のための示唆を得ることを目的としている。

先行研究として、高（2018）は、母語の影響が産出困難につながる可能性があるとは指摘しているため、母語転移の視点から、CJL が複合動詞の産出困難に関する原因を明らかにする必要がある。

そこで、本発表の予備考査として、母語転移を品詞構造の視点から分析してみると、日本語の複合動詞はすべて「V1+V2」であるが、中国語の複合動詞は4タイプの品詞構造になっていることが判明した。タイプ1は、日本語と中国語において、両方とも「V1+V2」という品詞構造を持っており、CJL にとって最も複合動詞の産出がしやすいタイプであると考えられる。タイプ2は、日本語に対して、その中国語訳が単純動詞になっているため、CJL が前項動詞か後項動詞に対応することによって、単純動詞を産出する可能性が考えられる。タイプ3の日本語に対する中国語訳が「単純動詞+他の成分」になっているため、CJL がこのような対応関係に従って産出すると予測できる。タイプ4は、日本語に対して、その中国語訳が文になっているため、CJL が文の形式で産出すると推測できる。このような多様な品詞構造の異同が、CJL が複合動詞の産出に困難さを伴う一因であると考えられる。

研究方法として、まず、「複合動詞レキシコン」から約2700の複合動詞について、4タイプに分類し、BCCWJを通して、それぞれの使用頻度を調べ、使用頻度の高い順によって、複合動詞を取り出す。次に、実験群として、CJL（日本語能力試験N1合格者）80名を対象とし、統制群として、30名母語話者を対象に調査する。事前テストを通じて、既習語彙を調査対象語として選出し、許容度テストを行う。

研究結果から、CJL は母語話者との対比で複合動詞使用の違いを意識することが判明する。CJL が母語転移においてどのような影響を受けているかを明らかにすることによって、CJL がより自然な日本語を産出できるようになるのかを分析・考察する。

【参考文献】

高娟. (2018) 「作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析」『日本語・日本文化研究』第28号, pp. 64-71.

研究発表

第1会場 413 講義室

第2部 16:45-17:15 司会：佐古恵里香（流通科学大学特任講師）

オンラインコミュニティでの投稿における文末表現

—Discordにおける投稿と「キャラ」—

大谷鉄平（北陸大学専任講師）

オンライン上で見ず知らずの人同士が、共通の趣味や関心事などを通じてつながるコミュニティには様々なものがある。これらのコミュニティでは、個人の匿名性は担保されつつも、構成員は他の構成員との関係維持に配慮したやりとりがなされる一方、投稿には役割語（金水 2003）やヴァーチャル方言（田中 2011）も多用され、閲覧側はそこから投稿した構成員の「キャラクタ（定延 2006）」を構築できる。

今回は、投稿における文末表現に焦点を当て、①「対面での対話では用いられにくい表現（役割語・ヴァーチャル方言・ネットスラングなど）」、②「丁寧表現の使用／非使用」の観点から調査したうえで、全体的ならびに個別的な使用実態について検討する。特に後者では、特徴的な構成員の投稿をもとに、当人の「キャラ」について考えてみたい。

今回調査対象とするオンラインコミュニティは、オンラインゲーム（以下、ネトゲ）の「ナナリズム」ユーザーにより構成され、2021年に開設された。2025年1月時点で構成員は59名であるが、当該ネトゲを既に辞めた、という者も含まれ、調査期間（2024年7月1日～7月31日）で投稿を行った者はこのうち19名に留まる。また、同期間における全投稿は14806件であり、このすべてを調査対象とした。なお、調査にあたり、投稿者のHNはすべて「A、B、C、…」と置き換えたが、同一のアルファベットは同一の投稿者による。また、本オンラインコミュニティでは当該ネトゲ関連以外でのコミュニケーションも歓迎されており、他のゲーム、パチンコ・パチスロ、日常生活など、様々な話題でのやりとりが展開されているが、これらすべてを調査対象とした。なお、構成員19名（A～S）別の投稿数は、発表時に示す。

今回の調査では、得られたtext文書をExcelシートに、「日付（C列）」「投稿者（D列）」「投稿日時（E列）」「投稿内容（F列）」として貼りつけ、A列は全投稿における順番、B列は日付ごとの順番を記入し、作業シートとして作成した（シートは発表時に示す）。調査では、本シートを用い、①「対面での対話では用いられにくい表現（役割語・ヴァーチャル方言・ネットスラングなど）」、②「丁寧表現の使用／非使用」について検討した。また、頻出語や語同士の関連、共起ネットワークの調査に際しては、樋口耕一氏によるテキストマイニングツールのKH Coder（3.02）を用いた。

【参考文献】

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

定延利之（2006）「ことばと発話キャラクタ」『文学』7-6、pp. 117-129、岩波書店

田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』岩波書店

研究発表

第2会場 311 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

名誉の概念と決闘を強要する社会
—フォンターネの『エフィ・ブリースト』を手がかりにして—
菅野瑞治也（京都外国語大学教授）

フォンターネ（Theodor Fontane 1819-98）は、社会批判小説『エフィ・ブリースト』（Effi Briest 1895）を通して、19世紀のドイツ市民社会における「名誉の概念」と「決闘の意味」を詩的リアリズム的描写のもとで問いかけている。

17歳の少女エフィ・ブリーストは、38歳の有能な官吏ゲールト・フォン・インシュテッテンと結婚するが、ある日、夫の旧友で艶福家クラムパス少佐（45歳）と暫時不貞をはたらく。時が流れ、結婚生活7年目を迎えたある日、ゲールトは、妻エフィとクラムパスのかつての不倫関係を偶然知るに至る。ゲールトは、自己の名誉を守るため、クラムパスに決闘を申し入れ、結局、少佐を射殺する。エフィとゲールトは別離し、やがて彼女は重い病気を患い、三十年足らずの短い生涯を終える。

19世紀のヨーロッパ社会において、特に重罪・大罪と見做されていた妻の姦通・不倫は、必然的に姦通者（不倫相手の男）と夫による決闘という形を取らざるを得なかった。女性の「名誉」は、「肉体的・性的な清廉潔白さ」と強く結びついた「性的な名誉」、「女性の貞潔」それ自体と定義された。ある既婚の女性が、この清廉潔白さを失った場合、彼女は、自分の「名誉」をも同時に失うと考えられた。

それに対して、男たちの名誉の概念は、「個人的名誉」、性的名誉を遥かに超越し、ドイツの将校や教養市民層の男たちは一つの「社会的名誉」を持っていて、その男の高潔さと清廉潔白さは、社会からの承認に完全に依存していた。

フォンターネのこの小説の中で、ゲールトは、決闘をする理由を尋ねる同僚に対して、「私は、傷つけられたが、憎悪の感情や復讐心も一切ない。…それでも、そうせざるを得ない。人間は単に個々の人間じゃなくて、ある全体に属している。どこまでも、我々はこの全体に完全に依存しているのだ。」と語る。更に、「人間の共同生活においては、厳として存在し、すべてを判断する慣わしとなっているあるものが出来上がっていて、これに違反することは断じて許されない。我々を暴君的に支配する社会的なあるもの、まさにそれこそが、情愛や時効といったものを全く問題にしないのだ。」と彼は説明する。

名誉という考え方は、決闘の動機となっている憎悪・嫉妬といったあらゆる個人的感情の存在を隠蔽する。そして、決闘はそれ自体、「全体」、即ち、「我々を暴君的に支配する社会的なあるもの」への一体化・従属化の機能を有していたのである。

この研究発表では、フォンターネの『エフィ・ブリースト』を手がかりにして、19世紀のドイツ市民社会を席卷した決闘文化の本質に可能な限り迫り、併せて、女性と男性の「名誉」の概念について再考する。

研究発表

第2会場 311 講義室

第1部 14:50-15:20 司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

Kazuo Ishiguro: *Come Rain or Come Shine* の翻訳における二人称についての考察
林裕二（西南女学院大学教授）

イシグロ初の短編集の *Come Rain or Come Shine* での二人称とその日本語（翻訳）中での二人称の現れ方について考察する。

英語では主語・動詞に次いで二人称関連表現の顕示率が高い。日本語では人称は異なるが、会話では一人称に限定しない場合、主語の顕示率は約 33% である（水谷信子：2001）。日本語では一人称よりは二人称の顕示率が高いが、二人称を使うには制約がある。例えば、二人称の一つ「あなた」は同世代か下の相手にしか使えないという制約があり、むしろ使わないほうがよいと（坂本恵：2024）している。

Come Rain or Come Shine は、私（Raymond）とイングランドの大学で 30 年以上前に同期だった Charlie と Emily の三者の関係をめぐり、物語が展開する。三人は大学時代からベストフレンドと呼び合う仲である。結婚している Charlie と Emily 宅を訪れた私は、うまくいっていない夫婦関係の修復を Charlie に依頼される。

三人が関わる会話の二人称が翻訳で訳出された場合は、次のようになる。Charlie から私は「おまえ」、私から Charlie は「君」、Emily から私は「あなた」、私から Emily は「君」である。二人称の代表的な「あなた」については、文化審議会答申（平成 19 年）は、年齢や立場が同等、あるいは下位にある人に対して使うことが一般的となっており、やや冷たい響きがあり、名前を知っている相手に対しては名前を呼ぶことによって「あなた」を使わないようにすることもできるとしている。現実世界では、例えば就職面接では採用側は、応募者の基本的人権を尊重する姿勢から「〇〇さん・・・」と応募者の苗字で話しかけることを推奨している（厚生労働省）。やはり、「あなた」は使いづらいことが分かる。拡張すると、日本語では二人称使用には制約が多いと言える。

原作中の you とその別の格の関連語の顕示率を 100% として、翻訳中でそれに対応するに二人称の出現率を比較することで、三人の社会的関係が強く浮かび上がる。現代の英語では二人称は you だけであり、英語ではそこだけを見ても、上下関係は不明である。しかしながら、日本語の場合には二人称を使うか使わないか、また、使う場合には何をを使うかで、当事者間の社会的関係が規定されることを示す。

本学会九州支部大会（2025年2月）での同様のタイトルの発表に、統計的な資料を添えて、よりエビデンスを強めた発表となる。

【参考文献】

坂本恵（2024）『日本語教師が知りたい敬語と待遇コミュニケーション』東京：スリーエーネットワーク

水谷信子．（2001）『続日英比較 話しことばの文法』東京：くろしお出版

研究発表

第2会場 311 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：八尋春海（西南女学院大学教授）

『赤毛のアン』における女性の自己表現の変容

東本裕子（横浜商科大学教授）

本研究は、小説「赤毛のアン」の登場人物であるアンが、養母マリラをはじめ周囲の女性たちにもたらした変化について、また日本の女性に与えた影響について、自己表現または心持ちの変容の視点から考察を行うものである。

「赤毛のアン」を書いた小説家モンゴメリは、生涯を通して20編の長編小説と500編以上の短編小説に加え500編の詩と数えきれないほどの随筆を残したが、その中で「赤毛のアン」の主人公である孤児の少女アンには自分自身を投影する深い思い入れがあったと考えられている。父母と生き別れ、温かみに欠ける環境で育った自身の経験が、アンに理解ある家庭を与える物語として結実し、アンが性格上の欠点が多いものの、周囲からの愛情によって心豊かに成長し、まだ同時に周囲の人間もアンを中心に情感豊かに変化していくというストーリーは、モンゴメリの実生活と重なる部分、または自身の理想として描いたと思われる部分も多い。

この小説の登場人物の中には、当時 spinster と呼ばれ、蔑まれることもあった独身女性たちもたくさん含まれるが、モンゴメリは彼女たち一人ひとりの人間味あふれる豊かな個性を「精神的自立」と「経済的自立」を果たした一個人という温かい視点で捉え、同時に、彼女たちの年齢を重ねて頑なで感情表現がし辛くなった人格が、アンの影響を受けて柔らかな人柄へ変わっていく様子も丁寧に描いた。この女性たちの「心の変化」は小説「赤毛のアン」の中心テーマであると考えられる。

日本語版「赤毛のアン」は、代表的な翻訳者である村岡花子の卓越した翻訳書によって戦後多くの日本の読者を惹きつけた。日本における「赤毛のアン」の人気は他国と比較しても群を抜いており、小説の舞台でもあるモンゴメリの出身地のカナダ・プリンスエドワード島への日本人観光客の訪問数や日本で出版されている数々のアン関連本やテレビ番組等、日本の読者、特に女性読者を惹きつける魅力は、初版から100年を過ぎた現在でも色褪せることはない。翻訳者村岡花子の翻訳に込めた女性の自己表現への気持ちや、日本文化における自己表現の変容という角度から考察を行う。

研究発表

第2会場 311 講義室

第2部 16:10-16:40 司会：林裕二（西南女学院大学教授）

日中動物に関する慣用表現の翻訳

—『紅樓夢』を中心に—

張潔旋（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

日中両国は長い歴史と豊かな文化を有しており、それぞれの社会背景や思想体系に基づいて、動物に対する認識にも違いがある。例えば、呉（2022）は、日中両国における「虎」に関連する慣用表現を比較し、虎のイメージの違いを示している。また、張（2023）は、日中両国における「兎」に関する連想が異なる点を明らかにしている。このように、日中両国間の動物認識の違いに関する研究は一定数存在している。これに基づいて、たとえ同じ動物を用いた慣用表現であっても、翻訳の際には読者の意味理解に誤解を生じさせる可能性があると考えられる。以上の状況を踏まえて、本発表では、『紅樓夢』を中心に、動物に関する慣用表現の翻訳ストラテジーを考察することを目的とする。

『紅樓夢』は、中国古典文学の最高峰とされ、清代における社会、文化、思想を深く反映した不朽の名作である。これまでに『紅樓夢』の日本語全訳本は5版が刊行されており、これらの翻訳は、翻訳者の個性や時代背景により、表現や解釈に違いが見られる点が特徴的である。

『紅樓夢』における慣用表現の翻訳に関する研究は十全とは言い難い。劉・梁（2024）は、伊藤漱平訳『紅樓夢』に注目し、宗教、文化、歴史に関する慣用表現の翻訳を通じて、翻訳ストラテジーを検討している。しかし、翻訳者が日中間で認識差のある動物に関する慣用表現をどのように翻訳し、その隠された文化的意味を読者に効果的に伝えるのかについては、十分に考察されていない。

本発表では、『紅樓夢』を対象に、異なる翻訳者が動物に関する慣用表現をどのように翻訳しているかを検討し、それらの翻訳が日中間における動物に関する認識の違いをどのように表現し、その際にどのような翻訳ストラテジーが用いられているかを明らかにする。

【参考文献】

- 呉世欄（2022）「与“虎”相关谚语的中日对比研究」『汉斯期刊』Vol. 10 No. 11, pp. 2605-2611.
- 張晶鑫（2023）「中日両言語における『兎』使用の比較：使用頻度・比喩・ことわざの観点から」『統計数理研究所』第465巻, pp. 23-33.
- 劉小珊・梁曉鵬（2024）「伊藤漱平訳『紅樓夢』における慣用表現の翻訳について」『日本言語文化研究』第10巻, pp. 66-78.

研究発表

第2会場 311 講義室

第2部 16:45-17:15 司会：林裕二（西南女学院大学教授）

日本で魯迅作品を読む（Part 2）

—魯迅小説の受容と翻訳について—

王子涵（同志社大学大学院博士後期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

魯迅は、中日の文学史上に大きな足跡を残してきた偉大な作家の1人である。彼の作品は、中国の古典小説が持つ社会性や客観的な記述性を重視しつつ、言葉の使い方にも独自のこだわりを見せている。謝（1979：1）は、魯迅の言語的特徴を「語言明快、含蓄、準確、富有戰鬥性（筆者訳：言語が明快で含蓄に富み、正確かつ闘争的な性質を持つ）」とまとめている。また、篠田（1983：11）は、魯迅の小説について、「中国小説史の遺産を基盤にヨーロッパの近代小説の理念と深く結びつけよう」とする試みと分析している。このような特徴が、魯迅の文学を国際的な学術研究においても特異な存在として位置づけている。

魯迅文学の普及と伝播において、翻訳の重要性は言うまでもなく大きい。特に、日本における魯迅文学の翻訳と研究は、文学の伝播の1例としても、20世紀初頭から現代の学術研究に至るまで、時間の流れを超え、空間の制約を打ち破り、翻訳や再解釈を通じて、中日文化の深い対話を実現している。この長い伝播の期間に、数々の著名な翻訳家や研究者が登場し、彼らの努力は、「竹内魯迅」、「丸山魯迅」などと称される独自の視点を持つ翻訳者を生み出し、魯迅の作品の受容と翻訳に学術的な輝きをもたらしている。浅川（2010：7）は、「日本の魯迅論者の大半は、竹内『魯迅』の影響下にあるといっても過言ではない」と述べている。このような状況下で、翻訳者たちは、魯迅の著作を通じて、中国文学の理解を深め、その影響を受けながら、新しい翻訳と研究を試みてきた。魯迅研究において、学術研究と翻訳活動、そして魯迅の知名度が相互に関連しあう正の循環を形成していることを指摘することができる。

これまでの先行研究は、魯迅の思想性や「魯迅像」に焦点を当てたものが中心であったが、魯迅文学の翻訳出版事情や翻訳状況を通じて、彼の文学がどのように受容されてきたかを探ることも同等に重要な課題である。異文化の読者は、通常、翻訳本を通じて原文の奥深さを味読するので、翻訳文の表現方法が、読者の原文への理解に大きな影響を与えると考えられる。本発表では、翻訳本を手がかりに、翻訳者の翻訳意識と魯迅文学の日本における受容状況との相関を解明するために、異文化における翻訳状況を統計的に分析し、その特徴を考察することで、魯迅文学がもたらす文化的対話の実相を浮き彫りにすることを目指す。

【参考文献】

- 浅川史. (2010) 『魯迅文学を読む：竹内好「魯迅」の批判的検証』東京：星曇社.
篠田浩一郎. (1983) 『物語と小説のことば』東京：国文社.
謝卓綿. (1979) 『試談魯迅的語法修辭』広州：広東人民出版社.

研究発表

第2会場 311 講義室

第2部 17:20-17:50 司会：林裕二（西南女学院大学教授）

森鷗外のデスマスク考察とその行方

—鷗外のデスマスクはなぜとられたのか—

中野優子（東北学院大学教養教育センター助教）

大正11年2月9日に亡くなった森鷗外（1862-1922）は、親友の賀古鶴所（1855-1931）の発案、彫刻家の新海竹太郎（1868-1927）によって死の当夜にデスマスクがとられたのであるが、デスマスクについての思想的研究はなされてこなかった。また、その所在についても明らかにされていない。

鷗外のデスマスクはなぜとられたのであろうか。何面とられ、そしてそれらは現在にも残されているのであろうか。本発表では、鷗外のデスマスクがなぜとられたのかといった心的動機についての考察の他、森家のデスマスク観、その後の行方について明らかとなったことを報告する。考察にあたっては、鷗外の遺書や作品の他、家族・関係者資料を材料とし、分析を行った。また、デスマスク調査にあたっては、文学館や記念館などの各施設にもご協力頂いた。

鷗外は明治41年に次男不律を生後半年で亡くしたのであったが、この時デスマスクをとっている。（このことについては、鷗外の作品である『金毘羅』に詳しい）しかしながら、鷗外の死に際した賀古にその意識はなかったであろう。むしろ、夏目漱石（1867-1916）、島村抱月（1871-1918）、松井須磨子（1866-1919）らのデスマスクが次々と新聞誌上を賑わし、「偉人はデスマスクをとるもの」という知識人の間に起きた大正5年の漱石に始まるブームの影響を受けたものとの見方が妥当である。鷗外のデスマスクの石膏原型からは4つのブロンズが子供たち（於菟、茉莉、杏奴、類）に作られた。

鷗外を愛していたにも関わらず、激しすぎたために鷗外の自伝的小説『半日』に悪妻として書かれてしまった後妻の志け一家は、鷗外没後は社会的孤立を余儀なくされた。亡き鷗外に救いを求める生活は必然として鷗外のデスマスクを神格化するに至った。こうして神格化された鷗外のデスマスクは災害・戦災を乗り越え、親から子へと受け継がれ、1つも欠けることなく現存していることが本調査にて明らかとなった。現在のところ、於菟のものが文京区の鷗外記念館に（これは後にベルリンの鷗外記念館に貸し出され1面の複製が作られた）、類と茉莉のものが津和野の鷗外記念館に、杏奴のものが日本近代文学館にあることが分かった。さらに、デスマスク製作に立ち会った与謝野寛（1873-1935）もブロンズをつくっていたことが明らかとなり、これも杏奴のと一緒に日本近代文学館で所蔵されている。石膏原型は2面存在し、1面は津和野の鷗外記念館に類の長男哲太郎より寄託、もう1面は新海遺族により江戸東京博物館に寄託されていることが本調査によって明らかとなった。

以上、本報告では思想的考察の他、上記発見に至るまでの経緯を含めた詳細を報告する。また、デスマスクの実物写真についても紹介の予定である。

研究発表

第3会場 312 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：藤山和久（広島経済大学准教授）

谷崎潤一郎作品における「塔」

蒙英璨（広島大学大学院博士前期課程）

本発表は、谷崎潤一郎の1918年中国旅行後から1923年関西移住後発表された『痴人の愛』などの作品を中心に、「塔」の表象に基づいて「支那趣味」の変容を考察する。

谷崎は1918年に中国へ渡航し、帰国した翌年に一連の「支那趣味」作品を発表した。これらの作品には、「塔」という建築物がよく見られる。『蘇州紀行』（1919年）の「虎丘の塔」、『西湖の月』（1919年）の「雷峰塔」は風景の一部として描かれているのに対し、『天鵝絨の夢』（1919年）の「橄欖閣」という塔は奴隷を幽閉させる舞台装置である。ところで、「塔」の表象は中国を舞台とする「支那趣味」とともに、『痴人の愛』以降の作品で姿がほぼなくなった。西原（2003）によると1926年二度目中国旅行後の谷崎は「支那趣味」を放棄したということになったが、それに対して、中谷（2007）は『痴人の愛』の「お伽噺の家」は「支那趣味」作品に隠されたオリエンタリズム言説のように植民地的な擬似オリエンタリズム的空間であると指摘した。つまり、谷崎は「支那趣味」を放棄することではなく、新たな形に変化したという。

これらの先行研究の指摘を受け、本発表は中国の「塔」の表象を分析しながら、『痴人の愛』でどのような変化したのかについて検討してみたい。考察のプロセスとして、まず『蘇州紀行』『西湖の月』で登場させた「塔」と『天鵝絨の夢』の「橄欖閣」という「塔」を比較させる。これらの作品における「塔」が持つ機能を明らかにした上で、機能をつけ、その機能が『痴人の愛』における「お伽噺の家」の「屋根裏部屋」に受け継がれる可能性を検証する。最後に、『鶴唳』（1921年）における「鎖瀾閣」という「楼閣」を補助線にし、「塔」から「楼閣」、「屋根裏部屋」へという変容のルートを示す。

【参考文献】

西原大輔（2003）『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』中央公論新社

中谷元宣（2007）「谷崎潤一郎『痴人の愛』論：〈お伽噺の家〉の意味をめぐって」関西大学
国文学会 國文學卷 91 264頁

研究発表

第3会場 312講義室

第1部 14:50-15:20 司会：藤山和久（広島経済大学准教授）

同一著者の文章表現に連続性が存在するのか？

—文体類似性の時間差比較を通じて—

柳燁佳（同志社大学外国人留学生助手）・山内信幸（同志社大学教授）

計量文体学では、文章にはその書き手の特徴があるとして、書き手不詳の文章に対して、何らかの根拠で絞り込まれた何人かの候補著者ごとに特徴を調べ上げさえすれば、問題の文章の真の著者は特定できると考える。しかし、こうした考えの前提、すなわち、同じ著者の全ての文章に、当該著者を特徴づける文章表現が一貫して発現しなければならない、いわゆる、「文体不変説」については、これが真でない可能性が高いという指摘も複数確認できる。しかし、これらの先行研究では、大病、出産などライフイベント前後に書かれた文章、あるいは、執筆時期に十数、数十年というような大きな開きのある文章同士が分析対象に選ばれているため、比較的短いスパン内に書かれた文章なら、類似した文章表現を持つ可能性が依然として残っている。

本研究では、この仮説に対して、検証を試みる。具体的に、被験者に選ばれる4名の小説家に対して、1人につきあらかじめ決まった1作品（起点作）の発表年から、一定の間隔（*i. e.*, 1, 2, 3, 5, 7年）をずらして発表された6作から無作為抽出された60個のサンプルを分析対象としたうえで、それぞれの起点作を基準としたときに、各被験者の文章表現の類似度を著者識別タスクにおける平均正解率に基づいて計算し、通時的に見て、文章表現に顕著な変化が見られるかについて考察する。抽象的な文章表現を計量的に捉えるために、会話文率、ひらがな・カタカナ・漢字・記号など構成要素の比率、文・段落の長さの平均に代表されるマクロな指標の他に、文字・形態素・品詞のN-gramや文節パターンをはじめとする文章のディテールに関するデータも採用する。

本研究において、従来から懸案事項とされる個人文体不変説に対して、著者同士の文体比較を通じて、独自の見解を提示する。これにより、計量文体学の一大成果である著者識別の効力と限界がはじめて明らかになり、今後、無名か匿名の文章について真著者の同定を要する際、本研究で得た知見は信用に足る解決策を提示できると主張する。

【参考文献】

- 尾木竜司・池田大輔（2023）「書き手の内面の変化に伴う文体の個人内恒常性の崩壊の検証：出産経験のある女性のSNS投稿を用いた調査」『計量国語学』33(8), pp. 571-585.
- 劉雪琴・金明哲（2017）「宇野浩二の病気前後の文体変化に関する計量的分析」『計量国語学』31(2), pp. 128-143.
- 柳燁佳・山内信幸（2023）「個人文体は経年変化するのか？—初期作品と直近作品の文体比較を通じて—」『日本比較文化学会 2024 年度国際学術大会発表抄録』

研究発表

第3会場 312 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：藤山和久（広島経済大学准教授）

英国人写真家フェリーチェ・ベアトの写真表現とその位置づけ

—英国人画家チャールズ・ワーグマンとの比較—

矢島真澄美（東北大学大学院国際文化研究科 GSICS フェロー）

本研究の目的は、来日英国人写真家フェリーチェ・ベアトの作品が新聞・雑誌・漫画という異なる表現メディアにおいてどのように扱われ、提示されていたのか、その特徴について、英国人画家チャールズ・ワーグマンとの比較を通して探ることである。

1863年に来日したイタリア系英国人フェリーチェ・ベアト (Felice Beato, 1832-1909) は、19世紀後半に従軍写真家として活動した人物である。彼は1855年にクリミア戦争取材し、その後、インド大反乱 (1857-1858) や中国の第二次アヘン戦争 (1856-1860) など、数多くの戦地で撮影を経験した。ベアトが撮影した戦争・自然・街並み・人物などを被写体とした作品は、写真帖『インドの写真』(1856-1883) や『中国の風景写真集』(1860) として刊行された。また、日本の風景や風俗を題材とした作品は、『日本の写真 完全版』*Japan Alums Complete* (1863-1877) や『日本の風景』*Views of Japan* (1868) として解説付きで販売された。今日、彼は幕末から明治にかけて来日外国人向けに販売した写真アルバム、いわゆる横浜写真の創始者とされている。

ベアトは1860年、第二次アヘン戦争を撮影するために中国へ赴き、そこで新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』*Illustrated London News*の特派員であった英国人画家チャールズ・ワーグマン (Charles Wirgman, 1832-1891) と知り合った。1861年にワーグマンが横浜に到着すると、ベアトも後に続き、1863年には共同でスタジオ「ベアト・アンド・ワーグマン商会」を設立し、1867年頃まで挿絵や肖像写真などを販売していたとされる。彼らは日本各地取材し、写真とイラストを通じて江戸時代末期の様子を記録した。たとえば、彼らは、生麦事件 (1862) などの歴史的出来事を取り上げ、写真や挿絵を通じてその情景を伝えている。1869年、ベアトはワーグマンとのパートナーシップを解消し、「F. Beato & Co., photographers」という個人のスタジオを設立したが、1877年には写真家としての活動から退き、ネガもスタジオも売却した。一方、ワーグマンは風刺雑誌『ジャパン・パンチ』の中で、挿絵を交えてベアトの姿や彼の写真家としての活動をユーモラスに紹介することがあった。

本発表では、ベアトとワーグマンとの共同制作に焦点を当て、『チャールズ・ワーグマン作品写真帖』、雑誌『ジャパン・パンチ』、新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』における記事を分析する。ベアトが撮影した写真は、ワーグマンの挿絵の基となった。また、ワーグマンの漫画をベアトが写真化することもあった。このように、新聞・雑誌・漫画という多様な表現メディアにおけるベアトの作品の扱われ方を探り、19世紀後半の複製技術や表象媒体の役割を踏まえながら、写真という表現メディアの特性とその位置づけを明らかにする。

研究発表

第3会場 312 講義室

第2部 16:10-16:40 司会：広池真一（北洋大学兼任講師）

旧茨城県庁舎内部の装飾分析
—当時欧米で流行したデザインと比較して—
相馬法仁（茨城県笠間市役所・職員）

旧茨城県庁舎（茨城県水戸市、現存）は、内部に様々な装飾を施されている。官公庁建築は、旧来、美術の視点から取り上げられることの少なかったものであり、装飾のデザイン上の特色、相互の関連、全体の意味等を検討することは、建築物の意義を把握するために重要である。先行研究では、山室裕氏の研究において簡易に触れられ、ゴシック調の建築物で、アール・デコ調の装飾が見受けられると指摘されている。本稿では内部の装飾について、デザインの特徴に留意しつつ再度更なる検討を加え、欧米における流行を踏まえて、当時の意義と美術の視点における価値を明らかにし、保存の重要性を確認したい。

○建材等の分析

建築物内部のタイル・大階段の手すり等の使用された建材を分析・比較することによって、設計者置塩章を代表する当時の設計者が、欧米で流行した建築デザインのいかなる要素を受容したのか明確となる。

○装飾模様等の分析

階段ホールの床は白と黒（濃青）の市松模様である。また、廊下の一部には三層に重なった六角形の装飾が施されている。一部に残る当時の壁紙と推測できる部分は、欧米で流行した植物柄に見える。一部の天井や柱、ドア上部には個性的な装飾が残っている。天井の装飾は、機械的な直線や植物的な曲線のデザインが確認できる。機械的なこのデザインからは、アール・ヌーヴォーの曲線意識とはまた違った取り入れ方の工夫が見られる。

各箇所の装飾や模様は、特に当時欧米で流行したデザインとの比較により、その位置付けを検証する際の参考となろう。

○内部の照明器具等の分析

天井のシャンデリアや階段のランプは、建築時に取り付けられたものなのか否かは確認できない。しかし、装飾や形状からアール・ヌーヴォーとアール・デコの印象を受ける。このことは1つの建築物で、意図的に複数のデザインを使い分けていたことを示す。

建築物内部においては、様々なデザイン様式に加え、セセッションや、一部に和テイストを取り入れるなど混沌としている。ただし、当時流行の最先端であった欧米におけるデザインの流行と比較すると、少なくとも影響を受けていることは明瞭である。

以上、今回は旧茨城県庁舎内部の装飾に関して、欧米で流行したデザインとの比較について報告したい。

【参考資料】

山室裕（2009年）「置塩章研究序説その1-大正9年官庁営繕時代から昭和12年三田学園記念図書館までの作品系譜-」『平成21年度日本建築学会近畿支部研究報告集』, pp.737-740

研究発表

第3会場 312 講義室

第2部 16:45-17:15 司会：広池真一（北洋大学兼任講師）

当事者研究と当事者批評
横道誠（京都府立大学准教授）

精神障害、身体障害、難病などの「当事者」が同じ問題を共有する仲間同士で「苦勞」の仕組みに関する共同研究をおこない、生きづらさをやらわけていく取りくみは「当事者研究」と呼ばれる。21世紀初頭、北海道の地域生活拠点、浦河べてるの家で始まり、全国の病院、福祉施設、自助グループなどに広がった。筆者自身、自閉スペクトラム症、ADHD、アルコール依存症、宗教2世問題、LGBTQ+などの当事者として、多数の自助グループを主催し、その枠組みのなかで当事者研究を進めている。

筆者は自身の当事者研究の成果を書物にまとめて、『みんな水の中——「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか』（医学書院、2021年）として刊行した。本書に対して新聞の書評で「当事者批評」というジャンル名を与えたのが精神科医の斎藤環だった。「当事者批評」という用語は、あきらかに「当事者研究」を踏まえている。筆者は本業を文学研究とする者として、自身の当事者研究を文学、芸術、娯楽などと関連づけ、自身の体験世界をさまざまな作品の例示で表現しようとした。それは当事者としての批評行為になっており、斎藤はそれを巧みな新造語で説明したのだった。

筆者は斎藤の評言に刺激されて、以後、当事者批評のさまざまなヴァリエーションを展開してきた。『みんな水の中』から4年弱のうちに出版してきた単著単行本、および筆者を中心的著者とする編著単行本と共著単行本は30冊近くに達する。それらの多くについて、筆者は「総合型当事者批評」、「個人研究型当事者批評」、「対話型当事者批評」、さらには「当事者紀行」、「当事者間インタビュー」などに分類することができると思う。

本発表では、当事者研究と当事者批評の関係を新たに問いなおし、その全体像を整理するとともに、当事者批評の方法について光を当て、その学問的な位置を考察することを目的とする。斎藤環は当事者批評を精神医学に属する病跡学——精神科医が作品やその創作者の生活史を検討しながら、天才性の源泉として精神疾患の傾向を論じる学問——を裏返したものと指摘した。病跡学が精神科の世界観の表明だとすれば、当事者批評は患者（当事者）の世界観の表明を示しているためだ。しかし、当事者批評はさらに文学研究、哲学研究、宗教学、心理学、社会学、文化人類学などとも結ばれている。さまざまな学問と連絡し、さまざまな文化の領域を含みこんだ当事者批評の可能性を本発表で明らかにしていきたい。

研究発表

第4会場 422 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：伊月知子（愛媛大学准教授）

文人筆談における「雅」と「俗」

—黄遵憲筆談資料を中心に—

蘇文博（総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程）

本発表は、清末の外交官であり詩人でもあった黄遵憲（1848-1905）が、日本人との交流において用いた筆談資料を中心に、その内容に見られる「雅」と「俗」の対比を考察することを目的とする。筆談は、日中間において共通の漢字を媒介とした意思疎通の手段として機能し、特に近代以前の知識人層の交流において不可欠な役割を果たしていた。本発表では、黄遵憲の筆談における「雅」と「俗」の内容を整理し、中国初代駐日公使団の異文化体験の実態を明らかにする。

まず、「文人」「雅」「俗」などの概念について整理する。「文人」とは、広義には文学や学問を志す人々を指し、特に漢字文化圏において詩文や書画に秀でた知識人層を意味する。「雅」は、伝統的に文人・士大夫層が用いる高尚かつ格式のある文語的表現を指し、詩文、典故、儒学的素養を含む語彙が特徴とされる。一方、「俗」は、庶民的かつ実用的な口語的表現を含み、実務的な対話や庶民文化に根ざした語彙を指す。

黄遵憲の筆談資料において、「雅」と「俗」の表現は使用場面に応じて異なっていた。公的な場面や政治的な交渉においては、典故を多用し、儒教的価値観を前提とした「雅」な表現が用いられた。これは、中国の伝統的な士大夫文化の延長として、知識層の間で共通の文化的基盤を強調する意図があったと考えられる。一方、私的な交流や日常的な対話においては、「俗」を交えたより実用的な表現が目立つ。例えば、現存する黄遵憲の筆談資料には、詩文の唱和や異文化交流、軍事・政治に関する議論のみならず、「女色」や「妾」、さらには「陽物の大小」といった極めて通俗的な話題も含まれている。これらの内容は、従来の「文人＝高雅」という固定観念を覆し、筆談が単なる知的交流の場であるだけでなく、時に極めて日常的かつ奔放な会話の場であったことを示唆している。本研究を通じて、黄遵憲が筆談において「雅」と「俗」をいかに使い分けていたのかを明らかにし、清末の日中知識人交流の実態をより精緻に理解することを目指す。

【参考文献】

黄遵憲著、陳錚主編（2019）『黄遵憲集』中華書局

黄遵憲著、實藤恵秀・鄭子編校（1968）『黄遵憲與日本友人筆談遺稿』早稲田大學東洋文學研究會出版

張偉雄（1999）『文人外交官の明治日本—中国初代駐日公使団の異文化体験—』柏書房

小川恒男（2008）『「近代」前夜の詩人 黄遵憲』広島大学出版会

郭真義・鄭海麟編著（2009）『黄遵憲題批日人漢籍』中華書局

Schmidt, J.D. (1994) *Within the human realm :The poetry of Huang Zunxian, 1848-1905*
Cambridge University press

研究発表

第4会場 422 講義室

第1部 14:50-15:20 司会：伊月知子（愛媛大学准教授）

村上春樹『一人称単数』における未来へのメッセージ
葉菱（淡江大学日本語学科准教授）

村上春樹の『一人称単数』は、2020年7月に発表された短編小説集である。収録された八つの短編小説のいずれにも作者である村上春樹を想起させる要素は見受けられる。例えば、「石のまくらに」の「僕」が「文学部」在籍していたことや、「一人称単数」の「私」が全く「中華料理」を口にしたいという描写が挙げられる。これについて、沼野（2020）は「現在の自分の時点から過去を回想するという姿勢が強いうえ、その一人称単数が作家＝村上春樹自身を強く思わせる、いわば自伝的な装いになっている」と指摘している。一方、「品川猿の告白」では人間の言葉がしゃべれる猿が登場するという超現実的な設定が取り入れられている。つまり、フィクションとしての『一人称単数』には、作者である村上春樹を反映した「自伝的」な要素が綴られている。このように、本稿では、過去を語ることで「自伝的」な性質を獲得した『一人称単数』をどのように読み解くべきかを探求することを目的とする。

また、同年4月に刊行された村上春樹のエッセイ『猫を棄てる 父親について語る時』について、田中（2021）が「父のことを語ることで自身のことを語ります。それは村上春樹自身にとって世界とは何かという問い、生きる意味の問いにもなっています」と述べて、自分の過去を振り返ることが「生きる意味」を探るための試みだと論じている。この論点を敷衍して言えば、『一人称単数』における「回想」も「生きる意味」を追求するために組み込まれている可能性が示唆されている。

以上のように、本稿では『一人称単数』における「自伝的な要素」に焦点を当て、『猫を棄てる 父親について語る時』の内容を参照しつつ、作者である村上春樹を想起させる「回想」がどのように機能しているかを考察する。

【参考文献】

- 沼野充義（2020）「偶然に織り成された唯一の『私』—村上春樹『一人称単数』における回想と虚構の交錯—」『文學界』74(9), pp. 187-197
- 田中実（2021）「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語—〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる 父親について語る時』と『一人称単数』、あまんきみこの童話『ある日あるとき』—」『都留文科大学大学院紀要』（25）, pp. 11-34

研究発表

第4会場 422 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：伊月知子（愛媛大学准教授）

「死の文学」と言われた村上春樹文学と「グズグズした生」を肯定した村上春樹文学との距離—処女作『風の歌を聴け』から1980年代までの創作群から見て—

曾秋桂(淡江大学日本語学科教授)

内藤理恵子は村上春樹の短編小説を「死の文学」¹としており、また夏目漱石の『こころ』と対照しながら、村上春樹文学が「グズグズした生」を肯定する論説も出している。一方、平野純が処女作『風の歌を聴け』に出た「我々には生もなければ死もない。風だ」²の記述を根拠に、村上春樹を「現代日本を代表する仏教作家」³としている。

確かに村上春樹のデビュー作から死生問題がよく作品に取り上げられており、その後も脈々と底流している。死生問題を抜きにしては、村上春樹文学を語る事が出来ないほど大きな課題に向けて、第1段階作業として、既に『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985.6)までの創作群(計10作品、長編小説4篇、中編小説1篇、短編小説集3篇【30篇収録】、エッセイ1篇)を中心に、村上春樹文学における死生観の考察を終えた。結果としては、作品中、「否定の命題」、「即非の論理」の修辞法が見られるだけでなく、仏教思想の最も基本的な「空」・「無」の言説も散見されている。要するに、『世界の終り』(1985.6)までの創作群に限って言えば、「死の文学」と言われた村上春樹文学と「グズグズした生」を肯定する村上春樹文学との距離はなく、表裏をなす紙一枚なのである。

そして、今回の第2段階作業とした本発表では、外国を長期滞在している1980年代までの村上春樹の創作群を考察することにする。具体的な研究対象を長編小説(『ノルウェイの森』1987.講談社、『ダンス・ダンス・ダンス』1989.講談社)、短篇小说(『回転木馬のデッド・ヒート』1985.講談社、『パン屋再襲撃』1986.文藝春秋)に限定する。第1段階作業を経て得た結果と対照・比較しながら、第2段階作業で考察した結果を導き出す。

このように、村上春樹文学研究においては、避けては通れない死生観を体系化する課題に向けて着実に邁進するつもりである。

【参考文献】

平野純(2016)『村上春樹と仏教』楽工社P11、P39

内藤理恵子(2019)「「死の文学」としての村上春樹の短編小説—「眠り」「偶然の旅人」「中国行きのスロウ・ボート」他」https://note.com/njg_note/n/n9a19fa237b2a(2024年10月1日閲覧)

¹ 内藤理恵子(2019)「「死の文学」としての村上春樹の短編小説—「眠り」「偶然の旅人」「中国行きのスロウ・ボート」他」日本実業出版社 https://note.com/njg_note/n/n9a19fa237b2a(2024年10月1日閲覧)

² 平野純(2016)『村上春樹と仏教』楽工社P39では、「風」が仏教では伝統的に「無常なるもの」を象徴する言葉であったことは、『平家物語』を学校の教科書で読んできた日本の読者にはいまさら断るまでもない話でしょう」とある。

³ 平野純(2016)『村上春樹と仏教』楽工社P11

研究発表

第4会場 422 講義室

第2部 16:10-16:40 司会：佐藤慶治（鹿児島国際大学准教授）

計量テキスト分析による大隈重信の女子教育に関する演説談話の一考察

—「夫婦共稼ぎと女子の学問」を中心に—

橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）

大隈重信（1838～1922）の女子教育関連の演説・談話は、「女子教育の目的」（1905；明治38年5月）、「婦人に対する實業思想の急務」（1910；明治43年10月）、「夫婦共稼ぎと女子の学問」（1912；明治45年2月）、「婦人問題解決の急務」（1917；大正6年8月）、「現代の婦人に告ぐ」（1918；大正7年8月）等が存在する。

大隈は、明治から大正の政治家であり、東京専門学校（後の早稲田大学）の創設者としても著名である。また、女性教育の推進や女性の地位向上に果たした役割も大きく、その一例として、日本女子大学校（現日本女子大学）の創立委員長を務めた他、東洋女学校（現東洋女子高等学校）や明治女学校の創設にも協力していることが挙げられる。

筆者はこれまで、大隈の女子教育観を明らかにするため、大隈の演説談話の中から、女子教育に関連するテーマ等について、言語学的分析を行った。

「夫婦共稼ぎと女子の学問」（1912）は、『大和なでしこ』第十二巻第四號（大日本女學會）に掲載されたものである。本発表では、計量テキスト分析の手法を用いて、大隈の本演説に関する内容分析を行った結果を報告する。為政者の演説や談話の分析・評価は、政治的な関心事の変遷を把握する上で重要な意味を持つ。本発表では、これまで言語学的分析が十分に行われてこなかった本演説・談話に対し、KH Coder を用いて分析を試みた。

【参考文献】

- 横尾文子他（2016）「女子教育へのまなざし—大隈重信と中島ヤス」『佐賀女子短期大学研究紀要』第50集，pp.247-284、
- 大日方純夫（2017）「大隈重信は何を語ったか—『大隈重信演説談話集』を読む—」『早稲田大学史記要』48，pp.181-205
- 橋本恵子（2017）「大隈重信の演説資料の分析—「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」—」『「東アジアにおける日本学研究」国際フォーラム資料集』，p.26
- 橋本恵子（2024）「テキストマイニングによる大隈重信の女子教育観の分析」『第6回東アジア日本学研究学会国際シンポジウム予稿集』p.135
- 樋口耕一（2019）「計量テキスト分析における対応分析の活用—同時布置の仕組みと読み取り方を中心に—」『コンピュータ&エデュケーション VOL.47』，p.18
- 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して【第2版】 KH Coder オフィシャルブック』ナカニシヤ出版

研究発表

第4会場 422 講義室

第2部 16:45-17:15 司会：佐藤慶治（鹿児島国際大学准教授）

ハンナ・リデルの訃報記事に見る回春病院の欧米ネットワーク

浜本隆三（甲南大学准教授）

本研究の目的は、1932年2月に死去した英国人元宣教師であるハンナ・リデルの訃報を、日本国内と海外の新聞がそれぞれどのように報じていたのか比較検討する点にある。そのうえで、リデルについて日本国内で報じられている内容とは異なる情報を紹介する海外の新聞記事に注目し、リデルおよび回春病院がどのような独自のネットワークを構築、維持していたのか明らかにする。

ハンナ・リデルは英国生まれの宣教師で1890年にChristina Missionary Societyの派遣により来日した。熊本に配属されたリデルは同市郊外にある本妙寺で、境内に集うハンセン病者の姿を目にしたことをきっかけに1895年、回春病院を設立し、1900年には宣教師の職を辞して、1932年に没するまでハンセン病者の救済と同病院の運営に尽力した。

リデルの偉業については、これまで英国人好事家ジュリア・ボイドによる『ハンナ・リデル：ハンセン病救済に捧げた一生』（吉川明希訳、日経BPマーケティング、1995）、および猪飼隆明著『ハンナ・リデルと回春病院』（熊本出版文化会館、2005）といった先行研究により、その人物像および回春病院についての研究がなされている。ただ、国立療養所とは異なるリデル独自の事業を支えた欧米からの具体的な寄付ネットワークの内実については、これまでほとんど解明されていない。

リデルは回春病院の設立後、1907-10年、1921年、1928年に欧米に渡り、講演活動を行いながら寄付を呼び掛けたと考えられる。この講演旅行によって、回春病院は日本国内だけでなく国際的かつ多角的な支援体制を確立した。これらの旅行によって築かれたネットワークが、どのように維持されてきたのかを明らかにすることは、明治・大正期における日本の私設ハンセン病療養施設がどのようなネットワークによって支えられていたのかを知るうえでも極めて重要である。

発表では、とりわけリデルの訃報を積極的に報じていたカナダ東部地域とメリーランド州ボルチモアでの記事を比較し、前者の地域とリデルとの接点がキリスト教会のネットワークにあった一方、後者の地域との縁はリデルの個人的な人脈によって築かれたネットワークであった可能性について論じる。そのうえで、リデルとボルチモアの接点について、その背景や意義を掘り下げて検討してみたい。研究を通して、日本政府の隔離政策とは一線を画するハンセン病の私設療養所が40余年にわたり運営されてきた支援ネットワークの多様性が明らかになるのではないかと考えている。

【参考文献】

ジュリア・ボイド『ハンナ・リデル：ハンセン病救済に捧げた一生』吉川明希訳、日経BPマーケティング、1995。

猪飼隆明『ハンナ・リデルと回春病院』熊本出版文化会館、2005年。

研究発表

第4会場 422 講義室

第2部 17:20-17:50 司会：佐藤慶治（鹿児島国際大学准教授）

昭和の日本における女性表象の変遷

—映像コンテンツからの考察—

武富利亜（近畿大学教授）

昭和の映画やドラマで描かれる女性役はもっぱら専業主婦で夫を支え、育児に専念していることが多い。パートに出ることはあっても経済的に男性に依存している。フェミニズムの進展や女性の権利向上の動きが活発化してくる昭和五十年代になってようやく女性の地位の向上とともに変化の兆しがあらわれる。女性の労働参加率や平等権利の拡大が進み、メディアで描かれる女性のキャラクターは男性社会のなかで役割を得るようになる。NHKの大河ドラマは表向きには歴史的な主要人物（キャラクター）を使用し、裏で現代社会が抱える問題提起をおこなっていることは言うまでもない。例えば、昭和四三年に放送された司馬遼太郎原作『竜馬がゆく』の主人公坂本龍馬は、脱藩浪士ながら革命を起こした立役者であるが、当時の日本を社会学的な観点から分析した前田は「この放映時期は東京オリンピックと大阪万博の間の非常に国際化が加速している時代でもある。今で言う、グローバルな主人公像が大衆人気と結合したと思われる。また、学生運動の反体制的なムーブメントと幕末浪士達の志が融合したものなのかもしれない」¹と述べている。

NHK アーカイブスを閲覧すると昭和の時代につくられた大河ドラマは二七本ある。そのうち女性を主人公に据えた大河ドラマは（男女ダブル主演は含めず）わずか五本である。一つ目は、昭和四二年に放送された『三姉妹』、二つ目に放送されたのはその十四年後、昭和五六年の『おんな太閤記』、三つ目は昭和六十年『春の波濤』、四つ目は昭和六一年『いのち』、五つ目は昭和六四年の『春日局』である。昭和四十年代に放映された女の子を主人公にしたアニメーションをみると『魔法使いサリー』、『リボンの騎士』、『アタック No. 1』、『ひみつのアッコちゃん』、昭和五十年代は『ドクターランプアラレちゃん』と『あさりちゃん』、主人公ではないものの人気を博した女性キャラクター『科学忍者隊ガッチャマンⅡ』の白鳥のジュンがあげられる。昭和六十年代（六十四年まで）は唯一『風の谷のナウシカ』である。

本発表では昭和のなかでも特にテレビ放映がはじまった昭和四十年代から昭和六四年までに放映された女主人公を据えた大河ドラマと女性キャラクターが描かれるアニメーションを比較し、そこから学び取れるものを考察する。

¹ 前田崇博「大河ドラマのマスコミ社会学的批評」『大阪城南女子短期大学紀要』第53巻、p.134、2018年。

研究発表

第5会場 423 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：二村洋輔（名城大学助教）

国語教育における助詞「は」の教授法に関する一考察
井原彩樺（同志社大学学部生）・山内信幸（同志社大学教授）

小学生に対して助詞を教授する際、助詞の「は」の意味判別の教え方に非常に苦戦した経験がある。その理由として、教科書における「は」の意味分類は、「他との区別」・「主題」・「繰り返し」・「強調」が提示されているが、生徒はこれらの意味分類を普段から意識していないことに起因すると推測した。

そこで、「他との区別」・「主題」は名詞にのみ接続し、主語になるという共通点を持っていることから、この言語事実を指導に加えると、「他との区別」・「主題」と「強調」の区別を生徒ができるようになった。この教授経験を通して、概念的な意味による判別よりも、形態的な外形上の情報による判別、すなわち、接続する品詞に注目することによって、学習項目がより定着しやすくなると考えた。

影山・吉原（1999）は、国語教育における学校文法（以下、「学校文法」という。）の指導の現状として、中学校教諭へのアンケート結果を基に、指導者の85%が文法指導に困難さを感じており、その理由として、教科書の記述内容の矛盾があることを指摘している。

前述の自身の経験と影山・吉原（1999）の研究から、国語教育における文法指導の課題を解決するために、教科書ごとの矛盾点を再統合した新しい観点からの文法を提案し、新たな教授法を検討する必要があると考えた。

本研究の調査では、現在の学校文法の意味分類に、複数の提案者の間での異同が確認できた。このことから、影山・吉原（1999）の通り、この点が文法指導を敬遠しがちになる要因の1つと考えられる。そのため、本研究では、従来の意味分類の妥当性を再検討し、学習者の学習目的に合った新しい観点からの機能的な分類を提示し、それに沿った実践的な教授法を提案する。

この研究の特徴は、助詞の「は」に注目して、学校文法の再検討を行っている点である。日本語教育学の分野では、「は」の教授法を扱っている研究は存在するが、国語教育学の分野において、「は」の教授法をテーマに扱った研究は、管見の限り、少ないことが指摘できる。両方の研究領域において、「が」との連続性の中で論じられることが多いが、本研究では、「は」にもっぱら集中することによって、独自の分析と記述的妥当性を担保して、教育現場への応用を目指す。

【参考文献】

影山智一・吉原英夫. (1999) 「中学校国語科における文法指導の現状と課題」『北海道教育大学紀要 教育科学編』第50巻, 第1号, pp. 123-136.

研究発表

第5会場 423 講義室

第1部 14:50-15:20 司会：二村洋輔（名城大学助教）

仮定条件文におけるモダリティ制約について

—「と・ば・たら・なら」を中心に—

程天武（同志社大学大学院博士前期課程特別学生）・山内信幸（同志社大学教授）

日本語の仮定条件文の習得は、学習者にとって難しい課題とされている。その理由の1つは、日本語の条件表現「と・ば・たら・なら」が、文脈や用法に応じて異なる意味と機能を持つ点が挙げられる。このため、条件表現の助詞と文末のモダリティの組み合わせにおいて、学習者による誤用が頻繁に観察される。一方、日常会話において、条件文の具体的な用法が提示されているが、文末のモダリティの使用は観察されないことがある。

先行研究として、周（1983）や益岡（1993）小野（2012）、庵（2018）などの研究者が「と・ば・たら・なら」の用法を分析している。また、益岡（1993）やソルヴァン・前田（2005）では、「ば」は動作動詞の場合において文末モダリティが制約されることや、「たら」はモダリティ制約が弱いことが指摘されている。しかし、先行研究では、条件表現とモダリティの関係が全体的に解明されておらず、また、コーパスなどの大規模データを利用した学習者の使用実態に関する研究も十分ではない。このように、仮定条件文におけるモダリティ制約については、まだ研究の余地があると考えられる。

本発表の課題は、まず、日本語母語話者と日本語学習者を対象に、「と・ば・たら・なら」の文末に共起するモダリティ形式と使用実態を明らかにする。次に、現在使用されている日本語教科書を調査し、教科書で「と・ば・たら・なら」の内容に対する説明を明らかにして、不十分な点を補足する。最後に、日本語学習者の条件文における誤用の原因を明確化し、その誤用を防ぐための改善策を提示する。

本発表では、コーパス分析、比較分析、教科書調査を主な研究方法として用いる。予想できる研究結果として、まず、コーパス分析により、母語話者と学習者が仮定条件文を使用する際に共起するモダリティ形式が確認される。次に、学習者による仮定条件文における具体的な誤用類型が特定される。また、先行研究で指摘されている条件表現とモダリティの共起制約について、再定式化が行われる。さらに、日本語教育で用いられる教科書の不足点が明らかになり、誤用を防ぐための改善策が提案される。

本発表の意義として、コーパス分析の視点から、先行研究の中で言及されていない言語事実を明らかにし、母語話者と学習者が「と・ば・たら・なら」を使用して作成する条件文の使用実態を指摘する点が挙げられる。また、現在、使用されている教科書の内容を点検し、日本語教育現場へ改善策を提案することができる。

【参考文献】

庵功雄（2018）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク出版。

益岡隆志（1993）「日本語の条件表現について」』（益岡隆志編『日本語の条件表現』東京：くろしお出版。

小野米一（2012）「条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の異同について：中国人学習者のために」『北海道教育大学』34, pp. 13-24.

ソルヴァン、ハリー・前田直子（2005）「「と」「ば」「たら」「なら」再考」『日本語教育』125, pp. 28-37.

周複卿（1983）「日本語の条件表現」『言語学論議』2, pp. 28-47.

研究発表

第5会場 423 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：二村洋輔（名城大学助教）

アメリカの歴代大統領3名のインタビューにおける人称代名詞 *it* の使用傾向

— “when *it* comes to X” 構文に着目して—

山本茉莉（びわこ学院大学非常勤講師）・山内信幸（同志社大学教授）

本発表では、アメリカの歴代大統領である Donald J. Trump、Barack Obama、Joseph R. Biden, Jr. のインタビューを調査対象に、人称代名詞 *it* の使用傾向を定量的に分析し、演説や小説などとは異なる即時的な生起環境における「特別用法」の *it* の談話機能を明らかにする。大統領の発話に関する先行研究として、一人称代名詞の使用が国民の団結を強調する機能を果たすという報告がある一方で、*it* の談話役割に関する研究は、管見の限り、十分ではない。

また、「特別用法」の *it* の照応機能に基づく談話機能に関して、山本・山内（2024）は、小説の冒頭において、副詞句類や主語位置の「状況（環境）」表現と比較し、主語位置の *it* が提示する「状況（環境）」は、負の感情極性値を含み、後続文脈においても、負の感情極性が持続する傾向が強いと指摘し、人称代名詞の *it* が名詞と照応するように、具体的な実態を持たない持続的な状況をひとまとまりとして捉えて照応することが、その特性に起因すると考察している。

本発表では、“when *it* comes to X” という Obama による使用頻度が高い構文に注目する。“when *it* comes to X” の機能について、横山（2017）は、類似表現である “speaking of X” が「X についていえば」というように、旧情報に新情報を追加する際に用いられる一方、“when *it* comes to X” は、それまで話題に上がっていない話題を提示する転換の役割があると指摘している。筆者らは、“when *it* comes to X” には、人称代名詞 *it* の後方照応的な話題提示機能に基づく、話し手が導きたい話題に聞き手に引き込む「話題誘導装置」としての役割があると仮定し、他の類似表現（例：“regarding X” や “speaking of X”）と比較し、検証する。具体的には、生起環境や構文前後の文脈におけるトピックの遷移を定量的に調査し、先行研究で指摘されている Obama の特徴的修辞技法との関連を記述・分析する。

【参考文献】

山本茉莉・山内信幸. (2024) 「主語位置の *it* が提示する状況描写の談話役割に関する一考察：小説のチャプター冒頭に着目した比較調査を基に」『英語語法文法学会第32回大会予稿集』 pp. 47-53.

横山仁視. (2020) 「類似談話辞 “speaking of X” と “when it comes to X” の用法について：辞書の記述と映像メディアを例に」『人文論叢』第68号, pp. 15-30.

研究発表

第5会場 423 講義室

第2部 16:10-16:40 司会：大岩秀紀（関西外国語大学教授）

わが国の教育課程の変遷を見つめる（2）

－特に「平成」（前半）の学習指導要領に注目して－

白鳥絢也（常葉大学准教授）

本発表は、昨年度の発表「わが国の教育課程の変遷を見つめる－特に「昭和」の学習指導要領に注目して－」（2024年5月18日、於・椋山女学園大学）の続編に当たるものであり、特に「平成」（前半）の学習指導要領に注目する。その際、わが国の教育課程変遷の大きな流れ（「経験的」な学習重視と「系統的」な学習重視の往来）を抑え、学習指導要領の求めるものを改めて捉え直していきたい。

以下、「平成」（前半）における学習指導要領改訂のポイントについて概観する。端的には、平成元年には学校教育の位置づけやねらいが「生涯学習」の視点から大きく転換することとなり、平成10年には「変化する社会の中での学校教育のあり方の模索」ということになる。

1989（平成元）年の学習指導要領は、「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成」を掲げていた。この時代、わが国は高度成長の終焉を迎え、その影響は庶民の生活に影を落としていた。このときの改訂の柱として、①心豊かな人間の育成、②基礎・基本の重視と個性教育の推進、③自己教育力の育成、④文化と伝統の尊重と国際理解教育の推進の四点が挙げられる。また、改訂のポイントとして、①「生活科」の新設、②道徳教育の重視の二点が挙げられるとともに、「新しい学力観」という表記が多用された。

1998（平成10）年の学習指導要領は、「基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成」を掲げていた。このときの改訂の柱として、①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚の育成、②ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実の二点が挙げられる。また、改訂のポイントとして、①教育内容の厳選、②「総合的な学習の時間」の新設の二点が挙げられるとともに、「完全学校週5日制」が実施された。この学習指導要領では、「学力低下」は避けられないとマスコミが大きく取り扱い、国会も大きく混乱し、学習指導要領を途中で見直す等、対応に追われた。

そして再び、「経験的」な学習から、「系統的」な学習を重視する学習指導要領が求められるようになってゆく。「平成」（後半）の学習指導要領（平成20年度版・29年度版）については、次の機会に触れることとしたい。

時代は平成～令和へと流れ、近年の教育改革は実にスピーディーに邁進する。「道徳の教科化」や「小学校英語」、「主体的・対話的で深い学び」や「プログラミング的思考」、「GIGAスクール構想」……発表者はその眩さに一抹の不安を禁じ得ない。では、一人きりの学びは、駄目なのであろうか。不登校は、いけないことなのであろうか。現場に丸投げな「学習指導要領」は、本当に必要なものであろうか。わが国の教育課程の変遷を見つめながら、一石を投じたい。

研究発表

第5会場 423 講義室

第2部 16:45-17:15 司会：大岩秀紀（関西外国語大学教授）

「鏡」モチーフが語る表象とドッペルゲンガー
—ワイルド・芥川・太宰・ハーンの分裂する自己—
那須野絢子（常葉大学外国語学部専任講師）

鏡は古来より、幻想文学におけるモチーフとして、洋の東西を問わず登場してきた。本研究では、オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』（1890）、小泉八雲の「茶碗の中」（1903）、芥川龍之介の『歯車』（1927）、太宰治の『人間失格』（1948）、における「鏡」モチーフの役割を比較し、「分裂する自己」と「ドッペルゲンガー表象」の関係を考察する。これらの作品に共通するのは、鏡が、単なる自己の外面を写す道具ではなく、自己の内部に潜む異質な存在（他者性）を露わにし、時にはそれが破滅へと導く契機となる点である。

『ドリアン・グレイの肖像』では、鏡は変化する「肖像画」として登場する。ドリアンが若さと美貌を維持する一方で、肖像画は彼の老化と腐敗を映し出していく。ここで鏡（肖像画）は、自己の外見と内面の乖離を可視化し、分裂した自己を具体化する装置として機能する。ドリアンはついに肖像画を破壊するが、それは自己を破壊する行為でもあり、彼の死によって「分裂」は終焉を迎える。

一方、『歯車』の語り手は、鏡に映る自分を異様に感じ、次第に幻想と現実の境界が曖昧になっていく。鏡は彼の精神的な不安を増幅させ、自己の輪郭が揺らぐことで、外界も不確かなものへと変質する。この点で、『歯車』における鏡の役割は、分裂する自己を象徴するだけでなく、現実そのものの不確かさを示唆するものとなっている。

『人間失格』では、写真に映った主人公の葉蔵が、鏡像となって筆者を彷彿とさせる語り手の前に立ち現れる。葉蔵は「道化を演じる」ことで社会に適応しようとするが、自己の実体を喪失する過程で生きる屍となっていく。葉蔵が「演じる自分」を作り続けることは、ある意味で「もう一人の自分＝ドッペルゲンガー」を生み出す行為であり、鏡の役割を引き受ける写真の鏡像はこの二重性を象徴している。

最後に、小泉八雲の「茶碗の中」では、武士が茶碗の水面に見知らぬ男の顔を見る水鏡が登場する。この不気味な顔の持ち主は後に実体化し、武士を襲うが、結末では武士もまた失踪する。ここでは鏡（茶碗の水面）が、現実と異界をつなぐ扉となり、自己の分裂が死という形で完結する点が特徴的である。この男の顔は単なる異界の者ではなく、語り手の分身＝ドッペルゲンガーとしても解釈でき、自己の破滅を予告する存在となっている。

以上の作品に共通するのは、鏡が単なる反射の道具ではなく、自己の分裂を可視化し、時には自己を崩壊へと追いやる点である。このような「鏡」は、19世紀から20世紀の自己認識の変化によって生み出された新たな文学的モチーフであり、さらには幻想文学における「ドッペルゲンガー」モチーフの流行を促す役割を果たした。特に、鏡を通じて「もう一人の自分」が現れる現象は、自己の分裂を可視化するだけでなく、幻想文学における恐怖や不安の源泉として機能することが、本研究によって明らかになる。

研究発表

第5会場 423 講義室

第2部 17:20-17:50 司会：大岩秀紀（関西外国語大学教授）

憂鬱な心、心配事の私—井伏鱒二の『山椒魚』—

林盛奎（白石大学校教授）

井伏鱒二の初期作品系列には、いわゆる動物小道具といえる一連の作品群が現れる。早稲田大学時代に習作として書いた『たま虫を見る』をはじめ、『山椒魚』、『鯉』、『屋根の上のサワン』などがそれである。これらの作品は井伏が小さな動物に仮託して作家的自己形成時代の鬱積した内面を形象化したもので、井伏の初期の作品世界で欠かせない作品である。彼が『幽閉』（1923）を発表した当時、精神的に幽閉された状態で思い届いた作家の内面世界を一匹の山椒魚に仮託して形象化した。早稲田大学を中退し、前途が不確実なまま作家の授業生活に入った1923年頃、井伏を巡る状況は個人的な失意だけでなく、時代そのものの暗さにおいても幽閉と呼ぶのにふさわしい時代であった。

『山椒魚』は『幽閉』を加筆して題名を変えて「文芸都市」に掲載した井伏の処女作である。作品は人間の倦怠と絶望を象徴的に表現している。洞窟の中でぼんやりと2年間を過ごしてきた山椒魚は、もう洞窟の外に出ることができなくなった。彼の頭が洞窟の出入り口よりも大きくなってしまったからである。「これが何の失策なのか!」と嘆いてみても良い解答が浮かばない。

『鯉』は『山椒魚』と共に初期代表作の一つで、彼が文壇に登場する契機を作った重要な作品である。作品は〈私〉が鯉から解放される過程を描いた話であり、また鯉は南八の記念として作者の内部で彼を昇華させていく過程を描いた作品である。

〈心配〉は井伏の初期文学の〈憂鬱〉とともに青春の象徴である。『屋根の上のサワン』は心配でいっぱいの人に突然飛んできた白鳥を通じて出会いと別れの意味を発見し、私の内部世界が変わっていく姿が鮮明に表現された叙情的な作品である。言葉で表現できないほど心配事が多い私は、一匹の銃傷を負った白鳥を発見する。彼を拾い上げると白鳥の羽毛と体温が私の両手に伝わり、意外と重いその重さが憂鬱な心を慰めてくれた。

井伏は67歳で原爆記録に取材、調査を加え、日記形式の長編小説『黒い雨』（1965）を連載する。その中心は日記を情緒的に再現する生々しい被爆者の記録である。これまでの日常生活が一瞬にして止まってしまった時間の停止。井伏は冷酷なほど様々な死の瞬間を一握りのフォーカスに盛り込んでいる。隣人や友人の口を通じて、さまざまな角度から原爆の惨状を証言させる。必死に生きようとする被爆者たちの生の意志、その凄惨な光景の下で繰り広げられる人間愛。井伏は、自分だけの独特なユーモアで悲惨な状況を克服している。初期の作品で小動物に投げかける優しいささやきが『黒い雨』で見事に再演されているのである。

研究発表

第6会場 428 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：伊藤豊（山形大学教授）

坂本龍一における晩年性について

高橋暖（筑波大学博士後期課程単位取得退学）・李静怡（筑波大学博士後期課程）

現代日本、ひいては世界の音楽に大きな影響を与えた坂本龍一は、まず先駆的あるいは実験的な音楽家として知られている。その例として、シンセサイザーのいち早い使用、《NEO GEO》で沖縄音楽やバリ島の民族音楽を取り入れたことなどが想起されよう。実際、坂本自身何度も述べているように、伝統的規範や固定されたイメージからの逸脱が音楽制作の中心的エネルギーとして存在している¹。

このような観点から坂本を見たとき、最も興味深いのは晩年における作品である。というのも、音の連帯性が前提となっている従来の音楽から抜け出し、音そのものへの関心が最も結実しているのが晩年の作品だからだ。アルバム《async》では「すべてが同期されていく時代の流れにはあえて背を向け「非同期」を求めよう²」という言葉通り、環境音や、東日本大震災で被災し調律が狂ったピアノを用いたりなどして楽曲を制作している。他にも《2020S》にて陶器を割る音に注目したこと等、この点については枚挙にいとまがない。

本発表では、以上のような坂本の音楽的傾向を理論的に把握するために、エドワード・サイードの『晩年のスタイル』を参照する。サイードは、通常音楽家が晩年に至るような技術的・思想的完成を逸脱し、不安定な自意識と社会との間に生み出される緊迫した関係、そして完成を逃れ続ける性質を「晩年性」としている³。2度のガンを経験し、常に伝統的・社会的規範に抵抗してきた坂本を理解するのに、晩年性はこれ以上ない枠組みを提供している。

なるほど、確かにweb記事において坂本と晩年性の関連は指摘されてきた⁴。しかしそこでなされているのは晩年性を誤解したがゆえに発生する坂本に関する錯誤である。サイードが自らことわっているように、晩年性とは晩年のみを指すのではない。重要なのは、社会や凝り固まったものに対する抵抗であり、だとすれば、坂本の晩年性とは既に最初のソロアルバム《千のナイフ》やYMO結成時から観察されるのであり、我々の目にも見えるようになったのが《async》などの作品だと考えられないだろうか。

以上の背景から、本発表では、坂本に関する膨大な文献を丹念に追い、その音楽的思想を詳らかにしつつ、サイードの晩年性に関する理論を援用することで、坂本の晩年が持つカタストロフィ的側面、そして音楽制作の傾向を総体的に明らかにすることを目指す。

¹ 例えば、以下を参照。坂本龍一『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』、新潮社、2023年、54-56頁。

² 同書、171頁。

³ Cf. Edward W. Said, *On late style : music and literature against the grain*, Bloomsbury Academic, 2017 [2006], p. 3-4.

⁴ 松村正人“そのラディカルな晩年性と『async』”、CINRA、2023年4月26日、URL：https://www.cinra.net/article/202304-sakamotoryuichi_ymmtscl（最終閲覧日：2025年1月25日）。

研究発表

第6会場 428 講義室

第1部 14:50-15:20 司会：伊藤豊（山形大学教授）

社会の周縁から信仰の役割を問う

柴田香奈子（東京大学助教）

本発表では社会の周縁にいる厳律シトー修道会での調査から、日本における信仰の役割とその変遷について宗教社会学的な立場から検討する。厳律シトー修道会は、カトリック教会に属する隠世共住修道院であり、一般社会と一定の距離を置いて生活をしているという意味で社会の周縁にいるといえる。本発表では、男子修道院（Phare, Oita）と女子修道院（Tenshien, Nasu）の計4つの修道院を研究対象とする。具体的にはこれらの修道院に住む修道士と修道女への聞き取りと、1976年（昭和51年）から1994年（平成6年）までに院内で編纂された『修院日誌』を中心に分析を行うものとする。

これまで当該修道院で積み重ねてきたフィールド調査では、修道者たちの入会動機やその召命の経緯を可能な限り聞いてきた。また『修院日誌』に寄せられた記事を読む中で、1970年前後に入会した修道者たちと2000年以降に入会した者たちでは、入会動機に変化が生じていること、また男女によって召命への経緯の違いがあることがわかってきた。また逆に人が信仰を求める普遍的な心の傾向性も見えてきた。

最近の日本における宗教社会学分野では、宗教に“政治”や“カネ”、“カルト”といったキーワードを関連付けて論じられることが多く、宗教に対してネガティブな印象を与えかねない議論が散見される。実際、宗教二世問題を背景に「宗教＝カルト」といった浅薄な構図が各種メディアで取り上げられることが多くなった。一方、宗教離れが叫ばれる中、2011年の東日本大震災後に宗教や信仰組織が担った役割が再評価されたことも事実である。横井（2023）は、信仰の明確な自覚がないにも関わらず宗教行動を行い、「宗教的な心」を持っているのが日本人の特徴だという。その「宗教的な心」、つまり日本人の特徴である信仰心とはどのようなものだろうか。その信仰には何か役割があるのではないだろうか。また時代の流れの中で信仰の役割は変化しているのだろうか。

こういった問題意識を背景に修道院という共同体から、日本における信仰の役割とその変遷について検討したい。彼らの共同体は社会の周縁にあり規模も小さいが、一般社会の縮図であり、社会の問題を照射する力を持っているといえる。修道者は沈黙の戒律から多くを語ることはない。ただ多くを語らないからこそ、熟考された言葉を聞くことができる。また『修院日誌』には、彼らの信仰への想いが丁寧に綴られている。これらの分析は、日本人が持つ信仰、その信仰の役割を読み解くヒントになり得るだろう。

【参考文献】

横井桃子（2023）「日本人の宗教性を測る」岸政彦，稲場圭信，丹野清人編『宗教・エスニシティ』岩波書店，pp. 47-64

研究発表

第6会場 428 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：伊藤豊（山形大学教授）

仏教葬儀の市場化と消費者の行動
—真言宗における引導作法をもとに—
森下一成（東京未来大学教授）

消費社会の進展により葬儀をめぐる状況が変化して久しい。特に近年は COVID-19 のパンデミック、いわゆる「コロナ禍」が感染症対策を目的に掲げて葬儀の変化を後押しした観がある。それは仏教による葬儀においても例外ではない。その変容の1つの方向性は、「一日葬」、「家族葬」、「直葬」などの名称の別はともかく、簡素化である。それ以外に、消費社会の進展は葬儀のマネジメントに変化をもたらした。その変化とは、葬儀のマネジメントに大きな変化をもたらし、特に宗教家の役割が減退し、葬儀会社が中心的な役割を担うようになったことである。この変化は葬儀の市場化を加速させた。これにより、宗教的儀式としての葬儀を求める遺族の心情にも変化が生じている。

本報告では、真言宗の葬儀を事例として簡素化の傾向を示し、あわせて調査により明らかになった遺族の心情の変化にも言及する。

そもそも日本仏教における葬儀は禅宗によって確立された例が各宗へと波及したと言われており、真言宗も例外ではない。このような儀式や修法を真言宗は事相と呼ぶが、事相は一般的に諸経・儀軌に典拠を求めてその次第が成立するものの、真言宗葬儀の代表的な葬儀次第である『二巻書』は拠るべき諸経・儀軌を持たない。その『二巻書』の構成は、導師と識衆を要するものであり、葬儀における引導作法を長い時間をかけて複数人の僧侶によって手がける大規模なものだった。当然ながら、分刻みで進行する現代の葬儀に適応できるものではなく、市販の簡略化された次第書を筆頭に、葬儀会社等が求める30分前後の葬儀に収まるような略儀での葬儀が一般化している。仏教葬儀の合理化・簡素化はすでに始まっていたが、「コロナ禍」において行政が要請した公衆衛生政策の1つに COVID-19 による死者を病院から直接火葬場へ送るものがあった。このような政策が、縮小傾向にある日本経済や信仰の衰退と相俟って、いわゆる「直葬」を葬祭マーケットにおける確たる商品に押し上げた背景としてある。また、こうした直葬は、従来の引導作法として確立していた通夜から告別式への過程を削ぎ落とし、結果として、亡者を出家・得度させて秘印明を授けて即身成仏を図るという真言宗における引導作法の核心をも省くことになった。外部環境の変化がマーケットに影響を及ぼした一例として、さらには市場原理によって真言宗存立の基盤である事相に変化が及んだ事例として記しておく。

さらに、このような葬祭マーケットでは、仏教葬儀における僧侶の位置づけは「導師」として葬儀全体を導く役割から、葬儀に僧侶を呼び読経させるか否か、選択可能なオプションサービスに移行した。これにより、仏教の信徒に対する僧侶の法施は消費者に対する契約上のサービスとなり、結果として導師の施す引導作法の内容に組み込まれた教義を理解がなおざりにされたまま、仏教葬儀という形式を選ぶ傾向が現れている。

【参考文献】

- 佐藤隆彦（2015）「引導作法の研究」『葬儀の意義』高野山真言宗布教研究所，pp. 145-224
荒城賢真編（2018）『真言宗引導作法』青山社

研究発表

第6会場 428 講義室

第2部 16:10-16:40 司会：樋口謙一郎（椋山女学園大学教授）

ポップカルチャーと伝統文化の交差点

—アニメを活用した文化理解と言語習得—

松井夏津紀（京都先端科学大学准教授）・森岡千廣（京都先端科学大学嘱託講師）

本発表では、アニメを媒介とした日本の伝統文化の理解促進と、それに伴う日本語習得の可能性を探り、異文化理解と言語教育への応用について論じる。日本のアニメは、国内外の視聴者に広く親しまれている代表的なポップカルチャーであり、若年層の日本語学習者にとっても魅力的なコンテンツである。アニメには日常文化のみならず伝統文化が反映された作品も多く存在するが、アニメが伝統文化をどのように視覚的に表現し、学習者の文化的認識の深化に寄与するかについての学術的検討は十分に進んでいない。

語の意味には、denotation（字義的意味）と connotation（含意的意味）があり、外国語学習においては、学習者が単なる denotation の理解にとどまらず、語の文化的背景に基づいた connotation を適切に把握し、文脈に応じて運用できることが重要である。言語が異なると、同一の対象物を表す語であっても、文化的背景によって意味が大きく異なることがあり、そのため、言語指導においては文化的要素を組み込む必要性が指摘されている（Omar, 2012）。

これらの点を踏まえ、本研究では、「(1) アニメを活用した異文化理解と言語学習への関心の喚起」、「(2) ポップカルチャーを通じた伝統文化に対する認識の向上」、「(3) アニメを通じて学習できる伝統文化の要素を探究」、「(4) 伝統文化に関連する語彙の習得促進」、「(5) 文化体験を通じた異文化理解の深化と言語学習の定着」という学習プロセスモデルを提案する。特に若年層の日本語学習者に身近なアニメを文化要素として取り入れ、伝統文化の体験的学習を通じた異文化理解の促進と言語能力向上の可能性について考察する。

具体的には、『呪術廻戦』などのヒットアニメ4作品を取り上げ、それぞれの作品における伝統文化の要素を分析する。その上で、アニメの視覚的表現が学習者の文化的知識の獲得をどのように促し、関連する語彙の習得を支援するかを検討する。また、日本文化を学ぶ上で重要な「わびさび」や「もののあはれ」といった美的概念に着目し、これらの価値観がアニメ作品に共通して反映されていることを示す。さらに、学習者が講義を聴講するだけでなく、伝統工芸である金接ぎを体験的学習の手法として導入し、伝統文化の実践的体験を通じて、文化的多様性への理解を深めるとともに、語彙力の向上を促す可能性を検証する。

本研究を通じて、ポップカルチャーと伝統文化の交差点における言語教育の新たな可能性を提示し、文化を媒介とした日本語学習の有効性を明らかにする。

【参考文献】

Omar, Y.Z. (2012) The challenges of denotative and connotative meaning for second-language learners. *ETC: A Review of General Semantics*, 69(3), 324-351.

研究発表

第6会場 428 講義室

第2部 16:45-17:15 司会：樋口謙一郎（椋山女学園大学教授）

ハジチ文様にみるメトニミー
—呼称の解釈と俗信に注目して—
塩田英子（龍谷大学特任准教授）

本発表では、南島の入墨習俗「ハジチ」について、文様の呼称にみられるメトニミーの特徴の記述および考察を試みる。南島とは、喜界島をはじめとする奄美諸島を北限とし、南限は波照間島、西限は与那国島にわたる、琉球弧中部以南の文化圏をさす。南島は、絵文字のカイダージ、結縄のワラザンなど独特の記号体系を有したことで知られている。本発表で扱うハジチも、かつて成人儀礼として女性にのみ施された入墨の習慣で、多様な文様の記録が残っている。しかし、1899年に文身禁止令が発出されてより後は、徐々に衰退した。現在その面影を辿ることができるのは、1980年前後に沖縄県内で実施された大規模な調査により残された貴重な記録が中心である。それらの記録に残されたハジチの個々の文様にはそれぞれ、独自の呼称があり、地域による変異もある。また、文様にはさまざまな意味があり、文化や習俗を知る貴重な手がかりともなり得る。

本発表では、ハジチ文様について、南島の中でも沖縄諸島を中心に、その呼称と象徴的意味について、メタファーとメトニミーの観点から考察する。その上で、メトニミー的側面に注目し、そこから明らかになる語源解釈と俗信を通して、ハジチに込められたさまざまな意味を読み解く。そもそも文様は、何かを象徴する、といった意味では類似性、すなわちメタファー的性質が強い。たとえば●が月や星、太陽を象徴するということは容易に想像できる。しかし、文様には時として近接性に基づくメトニミー的側面もみられる。ハジチの中には、施術部位が同じである他の文様の名称を借用することによって、手背部の●に「扇型」を意味する呼称が当てられたり、指背部の矢尻型文様に「百足」を意味する呼称が当てられることがある。さらに、尺骨頭部に施されたアママと呼ばれる文様について、皮下の尺骨も地域によっては同様に呼ばれることがある。ここでいうアママはオカヤドカリを意味するが、尺骨がそう呼ばれるのは尺骨の形状がオカヤドカリの殻に類似していることに由来するメタファーとしての解釈に加え、この部位にアママ文様が施術されたからであるといった近接性に基づくメトニミーとしての解釈も示されている。上記のような、ハジチ文様のもつメトニミー的側面に注目し、考察を進めることで、ハジチについてはもちろん、メタファーとメトニミーの連続性や容認度について、考察の手がかりが得られる可能性がある。加えて、言語と類似してはいるが異なる記号に関してメタファーやメトニミーの視点を付すことで、当該地域の言語文化に関する理解が深まる可能性もあることを示したい。

研究発表

第 6 会場 428 講義室

第 2 部 17:20-17:50 司会：樋口謙一郎（椋山女学園大学教授）

多文化的教育環境における生成 AI の導入と課題

—フランスの大学を事例として—

ルッケル瀬本阿矢（立命館大学准教授）

本研究は、フランスの大学における生成 AI の活用状況を、多文化的な教育環境と社会的背景を踏まえて明らかにすることを目的とする。EU では 2024 年、生成 AI を含む AI 技術に対する世界初の包括的規制である「AI Act」が制定され、その影響がフランスの教育機関にも及んでいる（European Parliament and Council, 2024）。この規制は、リスクベースの管理を特徴とし、高リスク用途や生成 AI モデルに厳しい要件を課している（European Commission, 2024）。本研究では、多言語教育と多文化環境を特徴とするストラスブール大学を事例に、生成 AI の活用が教育現場にもたらす課題と可能性を調査した。

ストラスブール大学は 20 種類以上の言語教育を提供し、多文化共生の象徴的な場とされている（Faculty of Foreign Languages and Cultures, 2025）。このような環境において、生成 AI が多様な学習ニーズにどのように応える可能性があるかを検討するため、同大学の教員へのインタビューを実施するとともに、大学が発表している関連出版物を分析した。その結果、フランスの大学（Université）では移民学生が多く在籍しており、グランゼコール（Grandes Écoles）との二重構造が教育機関ごとの生成 AI 導入の格差を生み出していることが明らかになった。この格差は、多文化的な教育環境を有する大学において、生成 AI の活用が教育支援の公平性や実践に影響を与えていることを示している。

さらに、日本の教育文化との比較において、フランスの大学が自由と多様性を重視する一方、日本では規範や倫理を重視する傾向が、生成 AI 導入に特有の影響を与えていることが示唆された。この結果は、フランス特有の自由と多様性を重視する教育文化の中で、生成 AI 導入が抱える課題と可能性を同時に示している。本研究は、多文化的教育環境における生成 AI 活用が直面する課題と、その背景にある文化的・政策的要因を明らかにするものである。

【参考文献】

European Parliament and Council. (2024). *Regulation (EU) 2024/1689 of the European Parliament and of the Council of 13 June 2024*. Official Journal of the European Union, L1689, 1-144.

Retrieved from <http://data.europa.eu/eli/reg/2024/1689/oj>

European Commission. (2024, October 14). *Ai Act*. An official website of the European Commission. <https://digital-strategy.ec.europa.eu/en/policies/regulatory-framework-ai>

Faculty of Foreign Languages and Cultures - University of Strasbourg. (n.d.). <https://en.unistra.fr/study/faculties-schools-and-institutes/arts-literature-and-languages/faculty-of-foreign-languages-and-cultures>

研究発表

第7会場 526 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：中村友紀（関東学院大学教授）

中国武侠作品の日本語字幕に関する研究
—マルチモーダル談話分析の枠組みをもとに—
庄妍（神戸大学大学院博士後期課程）

本発表では、武侠要素を盛り込んだ中国映像作品の日本語字幕に焦点を当て、マルチモーダル談話分析の観点から武術用語などの異文化要素の翻訳方略を考察する。具体的には、張（2009）のマルチモーダル談話分析の枠組みを踏まえ、武術用語をはじめとする異文化要素の翻訳方略を分析し、字幕版では複数のモードがどのように再構築されているかを明らかにする。

近年、中国武侠映画やテレビドラマは中国本土のみならず海外でも広く人気を博している。このような映像作品は壮大なアクションシーンと興味深い物語で視聴者を魅了し、セリフには中国伝統文化に深く根差した価値観や哲学的思想が反映されている。時間的・空間的制約のなかで、映像や音響との調和を考慮して武術用語の意味を日本人視聴者にどのように伝え、充実した鑑賞体験を提供するかが、翻訳者にとっての重要な課題である。これまでの研究では、翻訳者が映像などの視覚モードとの相互作用を考慮しながら武術用語の字幕を作成することが指摘されている（汪・余 2020; 貢 2022）が、映像作品のマルチモーダルな特徴に注目してモード間の相互作用について体系的に考察する必要がある。また、中英間翻訳を対象とした研究が多く、日本語翻訳に関する研究は不足している。

そこで本発表では、映像作品を一種のマルチモーダルなテキストと見なし、選択機能言語学をもとに発展してきたマルチモーダル談話分析の観点から、武侠作品の日本語字幕翻訳を考察する。文化層、コンテクスト層、内容層、表現層からなるマルチモーダル談話分析の枠組み（張 2009）を用いて、武術用語などの翻訳方略（モード間関係を含む）を分析する。武術用語を多く含む中国映像作品としてドラマ『蓮花楼』（2024年公開）と映画『グリーン・デスティニー』（2000年公開）の2作品を選定し、合計615分間の映像を調査する。

その結果、武術用語の字幕は、ドラマ『蓮花楼』と映画『グリーン・デスティニー』ではそれぞれ起点志向と目標志向の翻訳方略を採用する傾向がある。また、字幕と映像の間には相補関係がよく見られ、映像などの非言語視覚モードは、字幕の言語視覚モードでは十分に伝わらない異文化要素の異質さを補完する役割を果たしていることが確認された。翻訳方略に影響する要因として、作品の公開年とジャンル、文化的背景、異文化要素の意味形成に関与するモードの多様性、視聴者の好みなどがあげられることが示唆される。

【参考文献】

- 貢希真（2022）「中国武術用語に関する字幕翻訳の日英対比—『グランド・マスター』を例に—」『国際文化研究（オンライン版）』28, 35-44.
- 汪宝荣・余建军（2020）「《一代宗师》武术术语字幕英译研究」『北京第二外国语学院学报』42(01), 71-82.
- 张德禄（2009）「多模态话语分析综合理论框架探索」『中国外语』6(1), 24-30.

研究発表

第7会場 526 講義室

第1部 14:50-15:20 司会：中村友紀（関東学院大学教授）

総合計画における港町文化の位置づけの変遷について

—石川県七尾市を事例として—

長田元（岐阜聖徳学園大学准教授）

日本各地には地域特有の様々な文化があるが、そのひとつに港がある領域に形成される港町文化がある。七尾港がある石川県七尾市は、港町に由来した文化が継承され様々な文献や資料に港町とも紹介されている。七尾市は1939年の市制移行後、能登半島における中心的な役割を担いつつ、港に関連した行事を開催している。

また、七尾市は港の分野に限らず総合計画に様々な文化振興施策を定めている。総合計画とは、自治体運営や文化政策、地域づくりに関する最上位の計画であり、多くの地方自治体が策定している。総合計画に示される文化はその地方自治体を象徴する文化ともいえるよう。

他方、2000年代は市町村合併により広域化した地方自治体が増加した。七尾市も2004年に隣接する3町と合併して新七尾市となった。市町村合併と文化に関する多くの先行研究は、市町村内の周辺地域の文化が衰退すると指摘している。こうした中、港町文化や総合計画における文化の位置づけについて、下記【参考文献】に示した研究があるものの、市町村合併の影響も付加した港町の位置づけの変遷に関する研究は十分に行われてない。

このため、本研究は新旧七尾市の総合計画（総合計画以前の建設基本計画含む）における港町や港町文化を構成する行事等の記述の特徴や位置づけを明らかにすることを目的に、文献として検証可能な1959年から2019年までの新旧七尾市の総合計画を調査した。

調査の結果、総合計画において港町が位置づけられた期間は、1990年3月から2009年（効力としては2019年5月）までであった。港町自体は1980年代後半のウオーターフロント計画などで意識づけられ、港湾都市から変遷して位置づけられていた。ただし、2004年の市町村合併以降は合併した旧市町の祭りや行事も振興すべき文化として位置づけられるようになった。その後、2019年の最新の総合計画では港町の記載はなくなり、同市は旧町にて振興されていた「演劇のまち」と位置づけられるようになった。加えて、2011年に「能登の里山里海」が世界農業遺産に登録されたことに伴い、港町文化を構成する行事が「能登の里山里海」を構成する行事としても位置づけられるようになった。港町の記載がなくなった背景のひとつに、市民の港に対する意識や産業構造の変化があると考えられる。

本研究では、総合計画における港文化の位置づけが縮小したこと、文化の縮小は周辺地域にとどまらず中心地域においても発生することを明らかにした。

【参考文献】

鈴木克也（2017）『地域における国際化シリーズ 新しい港町文化とまちづくり』エコハ出版。

藤岡麻理子（2022）「社会における歴史文化の位置づけ—五大都市の総合計画における記述の変遷から—」『文化政策研究』第16号 pp. 048-060。

研究発表

第7会場 526 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：中村友紀（関東学院大学教授）

18世紀英国における紅茶 —消費文化と女性蔑視が交錯するとき— 大野雅子（帝京大学教授）

ダンカン・キャンベルという18世紀英国の詩人が書いた詩に、「紅茶に捧げる詩」（1735年）がある。詩人は「献辞」において、「この詩を淑女の皆様方に捧げる」と宣言し、紅茶とは、美しく賢い女性の飲み物だと言う。ナウム・テイトによる「紅茶に捧げる詩」（1735年）においては、女神たちが我こそは紅茶の木の守護神であると競争を繰り広げる。18世紀の英国では、これ以外にも、紅茶と女性を結びつける詩が数多く書かれた。

19世紀に至ると、ジェイン・オースティンの小説などには、男女ともに紅茶を飲む場面がしばしば出てくるが、18世紀の文学作品において紅茶はなぜ女性の飲み物としてジェンダー化されているのだろうか。本発表は、この謎を解明するために、紅茶と女性を結びつける社会的・歴史的要因を、次の3つに分けて論ずるものである。

一つ目は、紅茶＝女性＝家庭という同一化は、コーヒー＝男性＝公共空間という同一化と軌を一にして行われたことである。男性と女性の領域を分ける「別々の領域」という考え方が形成されつつあった時代であったこと、男性たちが政治的議論や情報交換を行うためにコーヒー・ハウスを利用したこと—このような歴史的偶然が存在したためである。

二つ目は、ソースティン・ヴェブレンが『有閑階級の理論』において唱えた「代行的消費」である。富を蓄積した階級はその富を「顕示的に」消費したいと思う。さらに、妻は、忙しい夫の代わりにその富を「代行的に」消費することが求められる。高級な茶葉を好んで購入したのは女性自身であるというよりは、夫の代わりに行ったという見方もできるのである。

三つ目は、「消費文化のエロス化」という現象である。西洋文化の中に存在していた女性のセクシュアリティに対する恐怖は、勃興しつつあった消費文化に対する恐怖と同一化された。消費活動は「エロス化」＝「女性化」された。「大航海がもたらした物を消費する女性」というイメージが、「それによって利益を得る男性」のイメージを凌駕したのである。

女性が、当時大変高価だった紅茶を食欲に消費したというイメージは、西洋文化のなかの女性蔑視の伝統と結びつくことによって、エロティックなイメージと重なった。紅茶を飲む行為は、上品でもあったが、消費と性に貪欲な性としての女性の表現ともなったのである。

【参考文献】

Brown, Laura (1993) *Ends of Empire: Women and Ideology in Early Eighteenth-Century English Literature*. Ithaca and London: Cornell UP.

Shoemaker, Robert B. (1998) *Gender in English Society 1650-1850: the Emergence of Separate Sphere?* Essex: Pearson Education Limited.

Veblen, Thorstein (1899) *Theory of the Leisure Class*. Oxford: Oxford UP, 2007. 村井章子訳『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫、2016年

研究発表

第7会場 526 講義室

第2部 16:10-16:40 司会：佐藤和博（弘前学院大学客員教授）

異文化高齢者の生活実態と支援ニーズに関する予備調査

—神戸市における事例研究—

董航（環太平洋大学専任講師）

高齢化が進む日本では、地域コミュニティへの参加が、高齢者の健康寿命の延伸や社会参加促進に重要な役割を果たすと考えられている。しかし、異文化高齢者の場合、言語や文化の壁、社会的なネットワークの不足など、地域コミュニティへの参加を阻む様々な要因が存在している。

本報告は、海外ルーツ高齢者の地域コミュニティ参加に関する共同研究の予備調査として、神戸市における事例研究を実施した結果をまとめたものである。本共同研究では、千葉県市川市を対象に、異文化高齢者自身の視点から、シニアカレッジのような学習機会や仲間との交流を提供する高齢者向けのプログラムをはじめとする地域コミュニティへの参加状況、課題、ニーズなどを明らかにし、市川市の多文化共生社会の実現に向けた具体的な提案を行うことを目指している。

市川市は東京のベッドタウンとして発展し、2025年2月1日現在で116の国と地域から来た22,019人の外国人が暮らしている。高齢化も急速に進んでおり、2025年には人口がピークを迎え、その後は高齢化率が2020年の21.3%からさらに上昇すると予測されている¹。一方、神戸市は昔ながらの港町として栄え、2025年1月時点で153か国と地域から来た約6万人という、市川市よりもさらに多くの外国人が暮らしている。高齢化率も市川市より高い水準で推移し、2025年時点で29%、2047年には40%を超え、その後は高止まりすると予測されている²。

両市は、多くの外国人が暮らす多文化都市であり、高齢化と多文化共生という課題を抱えているという共通点がある。しかし、歴史的背景や外国人住民の構成、高齢化の速度といった点では違いも見られる。本報告では、神戸市における事例研究を通じて、海外ルーツ高齢者が地域コミュニティにどのように参加しているのか、どのような課題やニーズを抱えているのかを明らかにすることで、市川市における本調査に活かしていく。

¹ 市川市政. “人口・統計”. 市川市公式 Web サイト. 2024-04-05. <https://www.city.ichikawa.lg.jp/gen01/0000451374.html>, (参照 2025-01-20)

² 小川総仁. “神戸市、「人口100万人割れ」の予測まとめる 独自推計で39年後”. 朝日新聞デジタル. 2024-02-14. <https://www.asahi.com/articles/ASS2G5TBZS2DPIHB002.html>, (参照 2025-01-20)

研究発表

第7会場 526 講義室

第2部 16:45-17:15 司会：佐藤和博（弘前学院大学客員教授）

新たな経済の担い手としての高度人材の獲得と課題

—高度人材獲得に向けた取り組みに関する一考察—

郭潔蓉（東京未来大学教授）

21世紀に入り、イギリス、フランス、ドイツ、デンマーク、そしてシンガポールといった諸外国が「選択的移民政策」の導入を積極的に推進する中、日本が「高度人材」を意識した外国人労働者受け入れ政策を開始したのは、2012年に入ってからである。同年5月、政府は経済成長等への貢献が期待される高度な能力を持つ外国人労働者に限り、出入国上の優遇措置を実施することに踏み切った。具体的には「高度人材」と呼ばれる他の外国人労働者と区別するために「高度人材ポイント制」が導入され、在留資格の「特定活動」の枠において実施を開始し、その後、2014年の入管法改正により、2015年4月より高度人材に特化した新たな在留資格「高度専門職」を設置した。

いわゆる「ポイント制」と呼ばれるこの資格は、「高度学術研究活動」、「高度専門・技術活動」、「高度経営・管理活動」の三分野において、それぞれの特性に応じて、学歴・職歴・年収などの項目ごとにポイントを設け、ポイントの合計が70点に達した「高度人材」とみなされる者に対して、出入国管理上の優遇措置を与えることにより、高度外国人材の受け入れ促進を図るという制度である。

一見すると、この制度を導入したことにより、日本各地で多くの優秀な外国人材を獲得できるようになったかのように感じるが、研究調査を進めていくと、実際のところ高度人材の獲得に苦戦をしている地域は少なくない。また、企業側もグローバル人材の獲得に苦慮している現実がみえる。こうした事態を打開すべく、各自治体が地元への高度人材誘致も見据えて、様々な施策に乗り出しているが、まだ多くの課題を抱えている。

一方で、高度人材の卵ともいえる留学生も、卒業後日本に残って就職をする率は決して高くない。JASSOの調べによると、令和3年度に日本の高等教育機関を卒業・修了した外国人留学生（国内進学者を除く）53,840人のうち、国内企業等に就職した者は25,054人で、その割合は半数以下の46.5%である。日本で育てた高度人材の多くが卒業後に流出をしてしまうのは、日本社会にとっても不本意な事ではないだろうか。

本研究では、こうした背景を踏まえ、高度人材を積極的に確保しようとしている地域では、どのような政策を実施しているのか、また、その政策の効果はあるのか、それぞれの政策の実施状況を踏まえ、比較研究を行いたい。

研究発表

第8会場 525 講義室

第1部 14:15-14:45 司会：西川祥一（北洋大学教授）

中国人日本語学習者におけるマルチメディアによるオノマトペの習得

—アニメ視聴の実証実験を通じて—

譚梓怡（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

本発表は、実証研究として、教育現場にアニメ視聴を導入し、学習者の意識面と情意面に働きかけ、アニメ視聴がオノマトペの習得への促進につながることを明らかにする。

日本語オノマトペが4500語を収録されている小野（2007）の研究を基に、中国のN1教科書を調査した結果、オノマトペの量が少なくないことを判明している。また、田守（2002）によると、オノマトペの習得は自然なコミュニケーションに必要不可欠である。しかし、オノマトペが漢字を全く含まないので、中国語に翻訳できず、語の正の転移はほとんど存在しない。これにより、中国人日本語学習者はオノマトペの習得が難しい場合がある。

前田他（2015）では、今までのオノマトペの指導方法は絵本や文字教材が中心で、そのキャラクターのデザインとストーリー性が弱いことを指摘されている。また、馬（2016）は、音象徴性に基づく学習ストラテジーが最も効果的であると主張している。

以上のように、今までのオノマトペの指導方法は静的な文字やオリジナル絵本であり、中国人日本語学習者にとって、マルチメディアに基づく動的な枠組みの観点から見ると、視聴刺激とストーリー性が欠けていることが指摘できる。したがって、本発表は、日中で高い人気を誇り、オノマトペの使用頻度が比較的高い「SPY×FAMILY」を採用し、以下の2つのリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1：アニメ視聴がオノマトペの習得に与える影響を明らかにする。

RQ2：アニメ視聴がオノマトペの習得に与える影響要因を探る。

本発表の予想される結果として、マルチメディアを利用することが中国人日本語学習者のオノマトペの習得と自律学習につながることで、また、教育現場でマルチメディアを導入する指導方法が教師の教授法改善の一助となることが明らかになる。

【参考文献】

- 小野正弘. (2007) 『日本語オノマトペ辞典:擬音語・擬態語 4500』東京：小学館.
- 崔沫舒. (2021) 「中国の日本語教師のオノマトペ指導に関する認識」『武蔵野大学学術機関リポジトリ』第5号, pp. 91-110.
- 田守育啓. (2002) 『オノマトペ擬音語・擬態語を楽しむ』東京：岩波書店.
- 馬瓊. (2016) 「中国語日本語学習者のオノマトペ学習ストラテジーの一考察」『東北大学言語学論集』第25号, pp. 53-68.
- 前田安里紗他, (2015) 「日本語学習者を対象としたオノマトペの学習のためのデジタル絵本システム」『人工知能学会論文誌』30巻, 第1号, pp. 204-215.

研究発表

第8会場 525 講義室

第1部 14:50-15:20 司会：西川祥一（北洋大学教授）

日本語の「授受表現」に関する考察

—映像作品を通じて学習の可能性について—

呉翰辰（同志社大学大学院博士前期課程特別学生）・山内信幸（同志社大学教授）

日本語における「やりもらいの表現」は「授受表現」と呼ばれ、日本語の中で重要な文法表現の1つで、日本語学習者にとって、習得が難しい学習項目の1つと目されている。

孫（2014）は、中国の母語話者による日本語の授受補助働詞の習得状況を研究し、授受表現を2つの機能に分けている。1つは基本的な意味機能、もう1つは派生的な意味機能である。前者の基本的な意味機能の「恩恵・利益」以外の拡張用法が合わせて10種類確認され、後者はドラマのセリフが多く出てきて、初級段階で日本語の授受表現について教育でほとんど出ない知識とされている。

本発表は、「授受表現についての教育」を研究対象とし、日本語学習者が授受表現をより正確に使い、また、より積極的に使うための方策を検討する。具体的には、ドラマのシーンのセリフや人物関係に着目して、研究のための「授受表現」のデータを収集して、授受表現のメカニズムの分析・考察を進める。

本発表では、まず、データ収集方法として、映画作品から授受関係の用例に着目し、独自のデータベースの構築を行う。（あるいは、既存のデータベースの活用が可能かどうか、別途、検討する。）具体的には、台詞の中にある「あげる・やる」「もらう」「くれる」表現を抽出し、その際には、当該表現が用いられている使用状況について、会話参加者の関係性（性差、年齢差、身分差など）も併せて、記述する。授受関係は恩恵の伝達過程でのみ発生するが、恩恵が示す具体的な状況を細分化し、当該表現の間違いや困難さを検討する。

中国人日本語学習者にとって、「授受表現」の課題点を抽出した後、実際の検証として、研究対象を2グループに分けて、実験群を映像作品を通じて日本語の授受表現を学ぶグループとし、統制群を伝統的な講義を通じて学習するグループとして、両群の学習状況を比較・検討する。

本発表は、「授受表現」の教育実践に着目し、中国人日本語学習者を対象に具体的な改善案の提案の教育効果についての検証を行い、新たな文法教育の方法論の確立を目指す。

【参考文献】

孫成志. (2014) 「行為の授受を表す表現の習得に関する研究：中国語を母語とする日本語学習者を対象に」 大阪大学博士論文.

研究発表

第8会場 525 講義室

第1部 15:25-15:55 司会：西川祥一（北洋大学教授）

中国人日本語学習者における「ナガラ」の習得に関する一考察
祁雅麗（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

「ナガラ」構文は、日本語において同時進行を表現する重要な文法項目の1つであり、自然な会話や文章作成で頻繁に用いられている。本発表では、中国人日本語学習者（以下、学習者という。）における当該表現の習得状況を対象に、そのメカニズムを検討する。

国立国語研究所（1951：128）によれば、同時進行を表す「ナガラ」は、「ある動作・作用が継続されると同時に、他の動作・作用が並行して行われる事態における両動作を接続する」と定義されている。これは、学習者向けの教科書では、初級文法として中国語の「一边～一边～」に対応させることが多い。また、学習者を対象として行った同時進行を表す「ナガラ」の習得状況に関する先行研究においても、中国語の「一边～一边～」との対応関係が多く観察されている。

建石（2007）では、「ナガラ」の誤用がほとんど見られないと報告されている。その原因は、中国語にも日本語の「ナガラ」とよく似た「一边～一边～」の形式があり、母語の正の転移が生じる可能性があるためと結論づけている。一方で、村松（2019）では、学習者における同時進行を表す「ナガラ」に関わる誤用が観察され、負の母語転移が生じる可能性があることが指摘されている。

一般的には、中国語にも対応可能な「一边」構文が存在するため、母語の正の転移の影響を受けて、学習者が比較的習得しやすいと考えられている。しかし、筆者が行った予備調査の結果から見ると、中国語の「一边」構文と対応できる「ナガラ」も学習者にとって、すべて正用できる項目であるとは言えないことが判明している。また、村松（2019）では、対応しない場合に見られる4種類の「ナガラ」の用法についても、学習者にとってすべてが習得困難であるわけではないことが示されている。

そのため、本発表では、沼田（2022）に基づき、日本語の「ナガラ」（逆接用法を除く）を「動作継続を表す用法」「感情・思考継続を表す用法」「結果継続を表す用法」に分け、アンケート調査を通じて、それぞれについて、学習者（中上級レベル）の習得状況を調査し、分析する。その際には、母語の影響以外の学習者の習得状況が及ぼす要因を検討する。

【参考文献】

- 国立国語研究所. (1951) 『現代日本語の助詞・助動詞一用法と実例』 東京：秀英出版。
村松由起子. (2019) 「ながらの周辺的な意味に関する考察」『日本学刊』 22, pp.49-64.
沼田浩通. (2022) 「付帯状況のナガラ節と逆接のナガラ節が表すアスペクトの意味」『日本語教育研究』 第59集, pp.149-170.
建石始. (2007) 「中国語母語話者の同時を表す接続助詞の習得について：ながら・つつ・がてら・を中心に」『神戸大学留学生センター紀要』 13, pp.103-115.

研究発表

第 8 会場 525 講義室

第 2 部 16:10-16:40 司会：北林利治（京都橋大学教授）

リーディングにおけるボトムアップ処理の向上を目指した
初年次英語教育の精読の授業に関する一考察
橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

受験生の安全志向の高まりや「理高文低」傾向によって、同一の学部・学科への入学者の英語運用能力も多様化してきている。発表者の勤務校においても、近年、学生の学力の多様化が進んでおり、拙稿（2024）などで言及しているように、リーディングにおいて、文構造を理解するのに苦勞している学生が多く、初年次英語教育では、語彙や文法のレベルで意味を理解できるようになるために、ボトムアップ処理に関連したリーディングのスキルを養成することが求められる。

本発表では、発表者が担当するリーディングの教科書の英文における文構造を学生に分析させるパーシングのグループワークを実施し、その結果を報告する。なお、パーシングのアクティビティを行うにあたって、習熟度が低い学生にとって、主語や動詞、目的語などの文法用語を理解することが難しいと想定されるため、Tajino (2018) などが提案した「意味順」を活用してパーシングの簡略化を図っている。

発表者が勤務校でリーディングの授業を担当している 2 クラスにおいて、先述のアクティビティを取り入れた授業を 1 セメスター実施し、TOEFL ITP の Structure 問題を用いたプレテスト・ポストテスト（それぞれ 30 点満点のテスト）を授業実践の前後で行い、また、授業実践終了後に、アンケートとインタビュー調査を実施し、文構造に関連する能力が伸長したかどうかを検討した。

その結果、授業実践を行ったクラスにおいて、プレテストからポストテストにかけて、平均正解数が上昇し、文構造をはじめとした文法に関する能力に一定の伸長が見られたと結論づける。また、アンケートの回答より、パーシングのアクティビティを通して、1 文 1 文を理解していくことで、段落単位や文章全体での理解も行うことができる可能性が示唆された。ただし、インタビュー調査の回答を分析する限りでは、授業を通して身につけた文構造・文法の知識を学生自身が言語化することに苦慮している部分が見受けられ、より長期的にトレーニングを行っていき、習得した知識・スキルのアウトプットを行う機会が必要であると結論づける。

【参考文献】

橋尾晋平. (2024). 「日本人中級英語学習者のクラスにおける『意味順』を活用したリーディングの授業デザインに関する一考察」『比較文化研究』154, 87-98.

Tajino, A. (2018). MAP grammar: A systemic approach to ELT. In A. Tajino (Ed.), *A New approach to English pedagogical grammar: The order of meanings* (pp.175-184). Abingdon: Routledge.

研究発表

第 8 会場 525 講義室

第 2 部 16:45-17:15 司会：北林利治（京都橋大学教授）

台湾人学習者による日本語二重母音の発音特徴について

—長音との比較を通じた持続時間の分析—

洪心怡（高雄科技大学応用日語系教授）

日本語の発音教育において重要な課題の一つは、特殊拍の習得である。これには、促音 /Q/、長音/R/、撥音/N/、および二重母音の第二要素/J/が含まれる。異なる言語体系を持つ学習者にとっても、特殊拍の習得は日本語発音教育において常に中心的な役割を果たし、発音教育の重要な領域として位置づけられている。しかし、台湾人学習者の母語である中国語は音節言語であり、音の持続時間の違いが意味の識別に影響を与えない。そのため、学習者は特殊拍を普通拍として発音したり、普通拍を必要以上に長く発音したりする傾向があり、特殊拍と普通拍の区別が困難であることが指摘されている。特に、二重母音の第二要素/J/の発音に関して、台湾人学習者は音色の誤りは少ないものの、1 拍分の持続時間を適切に維持できているかについては明確な検討がなされていない。理論的には、二重母音と長音は音色の違いのみが存在し、いずれも 1 拍分であるため、持続時間は等しいと考えられる。しかし、実際の学習者の発音においてこの理論がどの程度当てはまるのかは、十分に検証されていない。本研究では、台湾人学習者が二重母音の持続時間を適切に発音できているかを明らかにするとともに、長音の習得との関連性についても考察を行う。

本研究では、台湾人日本語学習者 5 名を対象に、音響分析を通じて二重母音の持続時間に関する実験を行った。実験では、二重母音/aJ/、/uJ/、/oJ/を取り上げ、これらの持続時間を長音/R/と比較することで、学習者の発音特徴を明らかにすることを目的とした。まず、ミニマルペアを用いた音声実験を行い、例えば「カイケ /kaJke/」と「カーケ /kaRke/」のように、持続時間は心理的には異ならず、音色のみが異なる無意味語 6 ペアを使用して学習者に発音させた。その後、音響分析を行い、波形やスペクトログラムを基に/J/の持続時間を測定し、日本語母語話者の基準と比較した。また、長音/R/と二重母音/J/の持続時間の違いについても分析を行った。

分析の結果、台湾人学習者は日本語母語話者に比べて二重母音の持続時間が短い傾向にあることが明らかになった。特に、学習者は二重母音の音色に関しては比較的正確に発音できるものの、その持続時間の制御が不十分であった。また、二重母音/J/の持続時間と長音/R/の持続時間には一定の関連性があることが示唆された。つまり、二重母音/J/の持続時間が短い学習者は、長音/R/も短く発音する傾向が見られた。このことから、台湾人学習者は日本語の特殊拍の持続時間を体系的に認識できていない可能性が考えられる。本研究の結果から、台湾人学習者が持続時間の制御に課題を抱えていることは、長音だけでなく二重母音の発音にも顕著に現れているため、発音指導においては、より体系的で包括的なアプローチが必要とされる。

比較文化論 No. 43

発行：日本比較文化学会

発行日：2025年5月17日

本部事務局：

731-5193 広島市佐伯区三宅2-1-1 広島工業大学工学部環境土木工学科 風早研究室

日本比較文化学会第47回全国大会・2025年度国際学術大会準備実行委員会実行委員会：

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部 轟木研究室

Email: garagonokaoka@icloud.com

印刷：美巧社（760-0063 高松市多賀町1-8-10）

<http://www.bikohsha.co.jp/>

